

リリカルフルカウンター

ハーゼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「スターライトブレイカー!!」

フルカウンター
「全反撃!」

ドゴーン!!

全反撃には勝てなかったよ…

メリオダスのなやつが無双する話。

0	0	0	0	0	0	0
7	6	5	4	3	2	1
68	57	50	38	26	13	1

目次

くとある森

「ハッ、ハッ、ハッ…」

木々の間を少女は走り抜ける。

(どうして…)

後ろを確認しながら少女は考える。

どうしてこんなことになってしまったのか、と。

後方から木々をなぎ倒す音が少女に近づいてきている。

(あんなのいるなんて聞いてない！)

行き場のない怒りで頭がいつぱいになる。

ただ薬草を取りに來ただけなのに今少女は人生最大の危機にあつた。

(いやー…こんなところで死にたくないッ！)

少女は精一杯走る。

走って走って、とにかく走る。

既に数分は走っているだろう、身体からは玉の様な汗が出ている。

しかし音は少女に近づいていくばかりだった。

その事実には冷たいものが走り、かいていた汗が余計に冷たさを意識させる。

「キヤッ!？」

疲れからか恐怖からか地表に出ていた木の根に足を引っかけ転んでしまう。

起き上がろうとするものの痛みと疲労でうまく立ち上がることができない。

「早く…逃げなきゃ…」

少女は近くの木に縋りつき立ち上がるが足は震えるばかりで前に進まない。

そしてそんな事情は知らないとばかりに無情にも音の正体はすぐ後ろまで来ていた。

「あっ…」

少女は振り返ってしまった。見てしまった。

それは触れるもの全てを切り裂くであろう爪、砕けぬものはないであろう牙を持つ体長15メートルは優にある獣だった。

今度こそ少女の足から完全に力が失われ、膝が地面についた。

「ああ…」

獣が腕を振り上げる。

その腕が振り下ろされれば少女は原型をとどめない肉塊になるであらう。

（お父さん…助けてッ！）

獣の腕が振り上げたところでピタリと止まる。

標準を定めるためではない、少女の恐怖を煽るためだ。

少女の目からは大粒の涙が零れる。

（誰でもいい…誰か…）

そして獣の腕が振り下ろされる。

「助けて!!」

「はいよ」

少女の叫びに誰かが応えた。

「えっ…?」

振り下ろされた腕が少女に届くことはなかった。

獣の腕は止められていた、たった一人の人物に。

「うそ…」

少女はこれが夢なんじゃないかと疑う。

それもそのはず、その人物は少年なのだから。

あまつさえ片手で獣の腕を止めている。

こんな光景を見たらまず自分がおかしくなったのだと思うだろう。

「よいしょっとー!」

少年は獣の腕を掴み、数十メートル投げ飛ばす。

やはり夢なのかもしれない、そう少女は思ったが足に痛みがはしる。

その痛みがこれが夢でないことをつげていた。

「大丈夫か?」

「えっ!?! あっ、うん」

「ならよし、ちよつとそここでじつとしてろよ?」

そう言う少年はそこらに落ちている枝を何本か拾い、見比べ始める。

少女がそんな少年を不思議そうに見ていると木々をなぎ倒す音が響き渡る。

「嘘!?! まだ動けるの!?!」

それは獣が少年に向かって猛スピードで突っ込んできている音だった。

少年の耳にもその音は届いているはずだが気にした様子はなく枝を見続けている。

「んゝ、どれにすつかなあ」

「ちよつ!?! キミ、後ろ! 後ろ!」

既に獣は少年の後ろまで来ており、勢いそのままに噛みつこうとしていた。

「よし、これだな」

少年は振り向きざまに枝を一振りする。

それだけで勝負はついた。

一瞬の突風の後、獣は真つ二つになり絶命した。

「にしし、晩飯ゲゝツト」

「.....」

少年は獣から剥ぎ取りを開始する。

その光景に少女は言葉を失う。

しかし目の前の少年が獣を殺したということだけはわかった。

(助かった...)

獣の脅威が去り、少女の緊張の糸が緩む。

すると足の痛みがより鮮明になってくる。

「よかったあゝ!」

少女は仰向けになって生きていることを喜ぶ。

目の前の少年が味方かどうかはわからないことぐらい少女にもわかっていたが、死の淵を体験したことと少年の圧倒的強さの前では考

えるだけ無駄だと感じているのだろう。

(でも一体何者なんだろう?)

少女が体を起こすと獣をロープでしっかりと結んでいる少年の姿が見える。

「ねえ、君いったい何者なの?」

少女がそう尋ねると少年は手を止め少女の方を向く。

「俺はメリオダス。ドラゴン・シン憤怒の罪のメリオダス。聞き覚えねえか?」

「メリオダス……ううん、聞いたことない」

「そうか……それじゃあな。気をつけて帰れよ」

いつの間にかロープを結び終えた獣を引っ張り、メリオダスはその場を去ろうとする。

「……ん!?ちよ、ちよと待つて!」

少女は急いでメリオダスの服の裾を掴む。

「どうした?」

「私まだお礼してないよ!」

「そんなこと気にすんな。俺は飯を確保しただけだしな」

「いや、でも結果的に助けられたし、なにかお『グウウ』……」

／／／

「まずは飯だな。」

・
・
・
・

「ほいよっ、こんがり獣肉だ」

「ごめんなさい、助けてもらっただけじゃなくこんなおいしいそうなおご飯まで……」

「気にすんなって」

「うん——不味ーっ!!!」

「うまい飯とは言ってねえからな」

不味いなこりや、と言いつつもメリオダスは食べる手を止めない。

「よく食べられるね……」

「慣れってやつだ。それよりお前なんていうんだ？」

「リーフだよ。この先に行くのと村があつてそこに住んでる。メリオダスはどこからきたの？ここらへんじゃ見たことないけど」

メリオダスは残った骨である方向を指す。

「あつちだな」

「あつち、つてそう言う事じゃなくて出身地は？」

「はて？どこだったか」

「いいじゃん教えてよ」

リーフの言葉にメリオダスは頭をポリポリとかく。

「ほんとに覚えてねえのさ」

「えっ…」

「覚えているのは名前と名称だけでそれ以外はさっぱりだ」

「誰か教えてくれなかったの？家族は…？」

「目が覚めたときには誰もいなかった。あつた物といえばこの剣一本だけだ」

メリオダスは背負っている剣を指さす。

「……」

「お前が暗くなることじゃねえよ！」

そう言うのとメリオダスは立ち上がり、荷物をまとめる。

「そういうわけで俺は自分探しの旅の途中なんだ。じゃあな」

「————待って」

「うんにや、待たない」

リーフの声を無視してメリオダスはこの場を去ろうとする。

行く当てもなくさまようのは目に見えて明らかだった。

「自分のことが分かるかもしれないの？」

その一言でメリオダスの足が止まる。

「————どういうことだ」

「うちの村にすっごいもの知りなおじいちゃんがいるの。メリオダスはすっごい強いからもしかしたら知ってるかも」

「なるほど、行ってみる価値はあるな」

「じゃあ決まり！ついでに美味しいごはんも食べさせてあげる」

「んじや、案内頼む」

「ねえねえ、なんでさつきその剣使わなかったの？」

道中リーフは気になっていたことを尋ねる。

先ほどの獣との戦闘でメリオダスは剣を抜く素振りすら見せなかったからだ。

「余裕だったから」

「剣使えばもつと余裕じゃないの？」

「ちと名剣すぎんだよ、これ」

「どういうこと？」

「最低限に抑えたつもりでもかなりの威力が出ちゃうのさ。例えばさつき使っていたなら森の一带の木がなくなっていただろうよ」

「それってすごすぎ……——あつ、でもそんなすごい剣を持っているなんてメリオダスはやっぱり騎士様なのかもね」

「騎士様？なんだそれ」

「ええ!?そんなことも忘れちゃってるの？騎士様ってのは————」

騎士とはたった一人でも一国の兵力に匹敵する力を持ち、その力の強さから英雄などとも呼ばれる存在のことである。

民からは尊敬や畏怖の念から騎士様と呼ばれている。

「へえー」

「どうでもよさそうに聞いているけどメリオダスは騎士様かもしれないんだよ?」

「かもな。それで、村にはまだ着かないのか?」

「ええーつとね、村までは後すこ……煙……?」

向かっている方角から煙が上がっていることにリーフは気づく。

その煙はリーフの住む村から上がっているものだった。

「みんなっ!?!」

リーフは走り出し、メリオダスも合わせるように走る。

「あれはお前の村からか？」

「うん、何かあったんだわ！」

「そうか、なら急ぐぞ！」

メリオダスはリーフを抱え、負荷がかからない速度で森を駆ける。

近づくほどに焦げ臭いニオイが二人の鼻につく。

「村が…」

「賊か」

村についた二人が目にしたものは焼かれている建物と暴れまわっている賊の姿だった。

その光景を目にし、リーフは固まってしまう。

「み、みんなは…」

「安心しろ、村人は広場に集められているみてーだ。拘束されちゃいるがな」

「メリオダス、皆を助けて…」

「リーフ、お前はここにいろ」

頷くリーフを見てメリオダスは広場に向かって疾走する。

道中の賊は通り過ぎざまに倒していく。

「よお！小悪党ども」

「なんだこのガキイ！」

「まだ隠れていやがったか」

広場に姿を現したメリオダスに対して賊が近づいて行く。

「ガキじゃねえよ」

拳を横に一振りすることで数人まとめて吹き飛ばす。

「このガキ何もんだ!？」

「数でおしやーいいんだよ！」

「懲りないやつらだな」

「やめとけ、お前たち」

メリオダスが拳を構えたところで奥から一人の男が出てくる。

「お前が頭か」

「ああそうさ。で、お前もただのガキじゃねえな」

「だからガキじゃねえって言ってるんだろ」

「お前がガキかどうかなんてなあ、どうでもいいんだよ！重要なのはお前が俺達に喧嘩を売ってくれちゃったってことだけだからなあ」

男が指を鳴らすと巨大な獣が建物の陰から数匹出てくる。

その獣たちは先ほどメリオダスが仕留めた獣に酷似していた。

「その獣、お前たちの仕業だったわけか」

「おっ！知ってるのか？こいつらはなあ俺が独自に品種改良しているやつらだよお、結構な自信作なんだぜ？」

「ふくん、味はいまいちだったけど・・・な！」

そこらにある小石を蹴り飛ばし、村人に近づく賊を倒していく。

「あくあ、つまんないことするからやられんだよお前たちはさあく。ていうか一匹戻ってこないと思っただらお前が殺^やつちやつたわけ？すげえーじゃん！でも——」

これならどうかな？

男の言葉とともに村中から獣が出てくる。

その数は優に三十体を超す。

「なん十体来ようと関係n——ッ」

突然メリオダスの脳内にある風景が映る。

燃える民家。

何重もの悲鳴。

飛び散る鮮血。

赤き光を閉ざす暗闇。

「なんだ…これ…——」

「——グオオ!!!」

「キヤアア!?!」「何てひどい…」

頭を押さえたメリオダスを獣が殴りつける。

そこに続々と押し寄せる獣たち。

メリオダスに希望を見出し始めていた村人たちにも精神的にこたえるものである。

(今のは…俺の…記憶…?)

殴られるごとに身体がミシミシと悲鳴を上げる。

しかしそれよりもメリオダスは頭が痛んだ。
燃える炎に絶えず響く悲鳴。

「あれれ〜？余裕な態度はどこ行つたんだあ〜？まあ、もうミンチか。
ハハハハハ!!」

「———せえ…」

「ハハハハハ———あ?」

「うるせえ!!」

獣が集まる中心地、そこから黒い何か蠢く。

そして次の瞬間獣がすべて消し飛び、突風が村中を駆け巡る。

座らされていた村人たちは転がり、賊達はひっくり返り、民家についていた火はすべて消えた。

その中心地に立つのはただ一人、メリオダスだけだ。

「はっ?」

「おっ!声が消えた」

かろうじてその場で堪えていた男は目の前の光景が信じられなかった。

自信作である獣が一瞬にして吹き飛んだ、男を唾然とさせるには十分すぎるほどの出来事である。

「で、まだやんのか?」

にしつと笑いながらそういうメリオダスは男にとつては悪魔にか見えないだろう。

「こ、降参だ。俺らが悪かったからせめて命だけでも!」

「じゃあさっさと子分全員集めろ」

「わ、わかった。そのかわり命は———」

「わかった?」

「わ、わかりました!」

「うし、一件落着だな。お前らの処分は「化け物!これを見ろお!」———リーフ!」

振り返ると男の部下がリーフを捉え、首元にナイフを突きつけていた。

「隙を見せたなあ馬鹿め!!」

振り返ったメリオダスに対して男は渾身の魔力弾を発射する。
そのタイミングは完璧であり回避は不可能――

フルカウンター
「【全反撃】」

――なはずだった。

メリオダスを飲み込もうとしていた魔力弾は数倍にも膨れ上がって男を飲み込んだ。

「へっ?……グヘッ!」

呆けた部下の男の隙をメリオダスが見逃すわけもなく、リーフは無事に救出される。

「あ、ありがとう」

「動くなつて言っただろ」

「ごめん……でもメリオダスが負けそうなの見てたら居てもたつてもいられなくて……」

この言葉にはメリオダスも微妙な表情をする。

今回の落ち度はメリオダスにあった。

「でもどうやってあの攻撃を防いだの?ていうかなんで相手がくらつたの?」

「俺の魔力である【全反撃】フルカウンターはあらゆる攻撃的魔力を数倍にして跳ね返すことができるのさ」

「魔力?魔力に名前がついているの?」

「なんかおかs「リーフ!!」――ん?」

一人の男性がリーフに抱き着き、そのまま抱える。

「お父さん!無事だったんだね、良かった」

「帰ってこないから心配したんだぞ、本当に無事でよかった」

「メリオダスが助けてくれたの!」

「メリオダス?こちらの賊を退治してくれた騎士様のことかい?騎士様、本当にありがとうございませす!」

「騎士かどうかはわかんねえけど俺が憤怒の罪のメリオダスだ、聞き覚えねえか？」

「メリオダスは記憶喪失で自分探しの旅の途中なんだって、何か知らない？お父さん」

「うーん、聞いたことないな。村の者にも聞いておきますからなにかわかったらお伝えします」

「サンキュー」

リーフと父親は村人の手当てなどに戻り、メリオダスは瓦礫の上に座った。

きびきびと動く村人たちを眺めながらメリオダスは考える。

(さっきのは俺の記憶なのか?)

断片的なものだったためメリオダス自身よく把握できていないようだ。

しかし、ひとつだけはっきりしていることがあった。

「歩き回んのも無駄じゃないってことか」

収穫はあった。

それだけでメリオダスの足には力が入る。

「メリオダス様・・・でよろしかったでしょうか？」

メリオダスのもとに一人の老人がやってくる。

「そうだけど、爺さん何か用か？」

「リーフから事情は聞きました。なんでも記憶をなくされているとか。儂なんかの知恵でよければいくらでもお貸ししますぞ」

「妖精が知恵を貸してくれるとは頼もしいな」

「っ！気づいておられましたか」

「まあ、魔力量の違いだな。爺さん目立つんだよ、人間と一緒にいる妖精族つてのも珍しいからな」

老人は既に数百年は生きているであろう妖精族であった。

ならばその知識は人間の何倍もあることだろう。

「それで憤怒の罪のメリオダスに聞き覚えはあるか？生憎わかってい
ることはこれだけなんだ」

「・・・一つだけ、一つだけ聞き覚えがあります」

「ほんとかつ！」

「いや、しかしこれは…」

「どんな情報だっついていい！教えてくれ！」

老人は何やら口にするか迷っている。

しかしメリオダスの方も自身のことが分かるかもしれないため老人を急かす。

「……ドラゴン・シン憤怒の罪、その名を聞いたのは数百年前のまだ儂が小童だったところのことです。母から聞いたことがあります。その時よりもさらに遙か昔、へ七つの大罪」と呼ばれ恐れられていた7人の実力者たちがいたそうです。」

「七つの大罪…」

そのワードがどうしようもないほどメリオダスの心に刺さる。

「その者たちの強大な力は一つの世界だけでなく他の世界にまで影響を及ぼそうとしていたのです。そんな彼らは大罪人とされ、激闘の末滅ぼされたと聞きます。そしてその中の大罪の一つが——」

「ドラゴン・シン憤怒の罪ってことか」

「はい。しかし、これは子供に聞かせるおとぎ話のようなもので実在したかは定かではありません。恐らくはその名称はその七つの大罪の話をモチーフにして名付けたのでしようがそんな忘れ去られてい

るおとぎ話を一体誰が…」

「なるほどな！サンキュー爺さん、それだけわかれば十分だ」

七つの大罪、それがメリオダスにとって重要ななにかなのは間違いないだろう。

「メリオダス〜！こっちこっち！はやく〜」

「あんまり離れんじやねえぞ。それともちよいゆっくりしたらどうだ？」

花畑を駆け回る少女の後をゆっくりとついていくメリオダス。

ここには二人以外誰もいない。

「だめよく、こうして外を歩ける時間ってあんまりないんだから。それに私に合わせるのがあなたの仕事でしょ？」

「はあく、わかったよ」

メリオダスはスキップするかのように一歩進む。

それだけで10メートルはあつた距離を詰め、少女を抱きかかえる。

「ちよ、ちよつとメリオダス!?!」

少女は恥ずかしいのか顔を少し赤らめ、ジタバタする。

「こうした方が速いだろう？俺がいろんなところに連れてってやるよ」

しかしそれもつかの間で少女はメリオダスの言葉に食いつく。

「ほんと!?!私、海を見てみたい!」

「海か・・・ちと遠いな」

「そっか!」

残念そうに少女はうつむく。

それほどに少女は海をみたかったのだ。

「おいおい、なんて顔してんだよ。無理とは言ってないぜ？」

「えっ、じゃあ!」

「おう、連れてってやる」

その言葉を聞き、少女の表情が一気にぱあーつと輝き始めた。

・
・
・
・

「あく、海綺麗だったなあ。ずっといたかった」

帰り道、そんなつぶやきがメリオダスの耳に届く。

「それはちよつと難しいな。あんまし遅いとあいつらが心配すつから」

「メリオダス怒られちゃう？」

「すつげえー怒られるな。俺だけじゃなくお前も」

「ええ!?!じゃあはやく帰ろ!メリオダス急いで!」

「確かに時間がちよつとやべえかもな。あいつらキレたら怖くこえからな」。説教は勘弁だから絶対間に合わせなくちやな!」

少女を抱え、走る速度を少しづつ上げていく。

「どんだん景色が過ぎていく様は、夢なんじゃないかという気分になん女をさせる。」

それが名残惜しいのか今度はこんなつぶやきが聞こえてくる。

「また、来たいな…」

「そうだな」

「でも次はいつになるかな…?」

「いつだって来れるさ。お前が行きたいって思えばな。そんなときや俺が連れ出してやるよ」

「ほんとに?」

「ああ」

「でもそんなに外にいて大丈夫かな…?」

「大丈夫だ、お前は俺が守ってやる。約束だ、」



ストンツ

「——んあ?」

軽快な音と共に額に何か落ちてきたことでメリオダスは目を覚ます。

寝転がったまま顔を横に向ければ茶表紙の本が一冊。

「本？こんなところ？」

いるのは草原。それも見渡す限り続いている大草原だ。

そのため近くには建物も何も無いし、木も生えていない。

「運び屋が落としたりしてわけじゃねえな」

空を見上げるが青空が広がっているのみで飛行物などは見えない。

状況的にはこの本は突然出現したことになる。

そんな怪しい本、普通なら放っておくだろうが…

「珍しい本だな。高く売れっかな？」

旅人メリオダスは万年金欠状態だった…

本を手にとって回し見るがタイトルも著者も何も書かれていない。

表紙に唯一あるのは金色でできた装飾ぐらいのものだ。

しかし、メリオダスはその装飾に見覚えがあった。

「！このマークはベルカの…確か研究者達が使っていたもんだっけか？
なんでこんな所にあんのかしらねえけどツイてんな」

研究者の残した本ということは研究内容が書かれているかもしれない
貴重な本かもしれないということだ。

それ即ち、高く売れる。

パツと見600ページはくだらないためかなりの値がつくことだろう。

そんな期待を胸にメリオダスは内容を確認するが…

「なんだ？白紙…？」

開いたページには何も書かれていない。

ページをめくってみるが他のページも同様に何も書かれていない。

「ハズレか…」

隅まで確認するメリオダスだったが結局全て綺麗な白紙でできた本だった。

これでは売り物にならない。

期待していた分がつくりと肩が落ちる。

「まあ、枕ぐらいにはなるか」

が、すぐに気持ちを切り替え横になる。

メリオダスは本を枕に再び眠りについた。

メリオダスが眠りについてから数分後。
頭の下に敷いてある本が光り始める。

それは徐々に強さを増し、一際強い光を発すると魔法陣が形成された。

魔法陣の中からは四人組が出現する。

四人組は忠誠を示しているのか跪き、首を垂れている。

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にてございます」

「夜天の主に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

そして決まりであろう口上を口にする。

しかし、当然寝ているメリオダスにその言葉は届かない。

そうとも知らず四人は首を垂れ続ける。

(なんだ？何も言っていないぞ？)

さすがにおかしいと思っただろう。

四人のうちの一人である少女は顔を上げた。

「ちよつと、ちよつと」

『ヴィータちゃん、シーー！』

『ヴィータ、主の前での無礼は許さんぞ』

『控えるヴィータ』

状況を伝えようと声を出す少女に残りの三人は念話で語り掛ける。

「いや、無礼も何もこいつ寝てるんだけど…」

「「えっ？」」

少女の言葉を聞いて思わず顔を上げてしまう三人。

「zzzz…」

そこには闇の書を枕に寝ている彼女らの主の姿があった。

今まで数多の召喚に応じてきたがこんな主は彼女たちも初めてだった。



「…きろって…おき…」

何か聞こえる…？

身体も揺さぶられてる…？

(なんだ…？)

重い瞼を微かに開けば子供が俺を揺さぶって何か言っている。

(変な夢だな…)

「…きろ…！起きろって！」

段々と声が鮮明に聞こえて、意識もハッキリしてきた。

どうやら夢じゃないらしい。

まだ寝たりねえんだけどな…

「あつ！やっと起きやがった！鈍すぎだろ！」

「ヴィータ、口を慎め。主に無礼だぞ」

「そうよ、ヴィータちゃん。貴方だって寝起き弱いでしょう？」

「ぐっ、そ、そんなこと…」

身体を起こせば子供を含めた四人を確認できた。

活発そうな少女、雰囲気は穏やかな女、見るからに真面目な女、落

ち着きのある男。

ふむ、全く見覚えがないな。

「ふあ、お前たち俺になんか用か？」

欠伸をしながら気になったことを聞いてみる。

なんでこいつら俺を囲むように座ってんだ？

敵意はないから野党の類じゃねえってのは確かだけどよ。

「これは失礼！申し遅れました、我らはヴォルケンリッター。主を守る守護騎士でございます。闇の書の起動を確認し顕現いたしました」

ヴォルケンリッター？

闇の書？

さっぱりわからん。

「色々聞きたいことがあるんだがいいか？」

「ハッ、なんなりとお聞きくださいませ、主」

聞き間違いでなければ、さつきからこいつらの言う「主」というのは俺を指しているように聞こえる。

「主つてのは誰だ？」

「？それは勿論貴方様でございます」

不思議そうな顔をして四人ともこつちを見てくる。

不思議なのはこつちなんだけだな。

とりあえず他に気になったことを聞いてみるか。

「ヴォルケンリッターっていうのはお前たちの組織名だな？」

「そのようなものでございます。正確に言うならば我ら四人そのものを示しています」

「闇の書つてのは？」

「・・・すみません主、間違いならば申し訳ないのですが、もしや我々についてご存知ないのですか・・・？」

「おう、全くもってな」

「・・・」

ありや？

全員固まっちゃった。

こいつらつてそんなに有名な奴なのか？

「・・・よろしければご説明させていただいてもよろしいでしょうか？
主の今後に関わることゆえ」

「じゃあ、頼む」

・
・
・
・

「お判りいただけただけでしょうか？至らぬ説明ではありませんでしたか

…?」

「いや、大体のことはわかった」

話を聞いて分かったことは

・俺が拾ったまくら・…じゃなくて本が闇の書といい、俺は主に選ばれた

・その持ち主を守るのがヴォルケンリッターだということ。プログラム?らしい

・こいつらの名前。

少女がヴィータ、穏やかなのがシャマル、真面目なのがシグナム、落ち着いてるのがザフィーラ

・役目は俺を守ることとリンカーコアを確保して闇の書を完成させること

・闇の書が完成すれば主は絶大な力を得られる

「つてことだな」

「はい、その通りです」

まあ、簡単に言えばヴォルケンリッターっていう仲間ができたって感じか。

一人つてのは退屈だしちよっどいいかもな。

ただし蒐集つてのは禁止だな。

「今、完璧に枕つて言おうしてたよな…?」

「き、気のせいよきつと…」

「枕としてはちと固すぎだな」

「やっぱり枕扱いしてるぞ!」

そして、あまり時間が経ってないがヴィータが単純かつ面白いことがわかった。

「ヴィータ!」

「!?し、しつれいしました…」

あとはシグナムがお堅いこともな。

「別に気にすんなヴィータ。仲間なんだ、そんなぐらいが丁度いい。他の奴らもこんぐらいでいいんだぞ?」

「主メリオダス、我らは守護騎士でございます。そのような——」

「そういうお堅いのあんま好きじゃねえんだよ。なんつうかむず痒くなってくるだよな。俺は主って柄でもないしな」

「し、しかし・・・」

思った通りシグナムは半分堅い。

こういう奴は周りから懐柔していくしかない。

「見たところヴィータはそういうの苦手だろ?」

「まあ、アタシは苦手ってわけじゃないけど好きではないかな」

「ヴィータ、またお前は——」

「まあまあいいじゃないのシグナム。メリオダスちゃんがそう言ってるんだから。ってちゃん付けはさすがにあれですかね?」

「全然気にしないぞー」

「シヤマルまで何を言ってるんだ!ザフィーラ、お前から——」

「別にいいんじゃないか。主がそう言ってるのだ。尊重すべきだろう」

「お、おまえたち・・・」

思ったより簡単に事が運んで驚いている。

というかザフィーラは思っていたよりも柔軟性があるな。

「そうそう、シグナムは堅すぎなんだよ」

「少しは肩の力抜いてみたら?」

「度が過ぎる時もあるということだな」

「うっ・・・」

あともう一押しってとこだな。

こういう時の必殺つかうか。

「シグナムが嫌なら別に無理強いはしないけどな」

「け、決してそのようなことはございません!ただ・・・その・・・主に対し簡単には言葉遣いは・・・」

「別に口調はそのまま構わねえ。ただ畏まりすぎるなってだけだ。俺はお前たちとうまくやっていきえてえ。にぎやかで面白そうだしな。よろしくな」

「主メリオダス・・・はいー!こちらこそ」

よし、これでむず痒さもなくなんだろ。

「そういえばずっと思ってたんだが・・・」

「なんでしよう?」

「お前ら寒くねえの?」

「「「「「「「」」」」」」」」

こいつらすっげー薄着なんだよな。

暖かくなってきたてはいるが今の時期はまだ寒い。

「「寒いです・・・」」

「俺は平気だが?」

そう言うとならザフィーラはオオカミの姿になる。

なるほど、守護獣だったのか。

「ザフィーラずるいぞー!寒いから動物形態になっただろう!」

「・・・そんなことはない」

「じゃあなんで目逸らしてるんだよ」

どうやらザフィーラも寒いらしい。

そりやそうか着込んでる俺でさえ少し寒気がしてきたんだし。

「まいったな、さすがにお前らのサイズに合う服はねえし、街までもちよいと遠い」

そして何より金がない。

これからは狩りの頻度増えそうだな。

「それは心配ないですよ。私達は甲冑を纏えばいいですから」

「それだ!さすがにシヤマル!」

すぐさま四人の周囲に魔力が集まっていき、鎧を形成していく。

なんか所々禍々しいな。

「あら?ちよつと大胆かしら」

「す、すこし露出が高くないか...?」

「へえーセンスいいじゃん。ここのドクロいい感じだ」

「とてもしつくりとくるな」

シグナムとシヤマルは所々チラリズムがあっただけいい感じだ。

胸も強調されててドストライクだなこりゃ。

残り二人はまあ、普通だな。

「あ、主!これはどうなんでしょうか!?!」

「どうって似合ってるぜ?」

「ど、どうも・・・って、そうじゃなく何故こんな甲冑のですか!」
甲冑のこと俺に言われても俺が作ったわけではないんだが。

まあ、俺の趣味と完璧に合致してるが。

「私たちの甲冑はメリオダスちゃんのイメージが強く影響するの」
「だから抗議してんのか」

なるほど、そりゃあ俺の趣味と合致するわけだ。

闇の書グツジヨブ。

(それにしても・・・そそるな)

手で短い裾を引つ張って肌を隠そうとしたり、腕で胸を隠すポーズ。

極めつけに恥じらい顔。

「ど、どうにかありませんか...?」

「ふーむ、どうにかと言われても俺も原理がよくわからんからなく」

「そ、そんな...」

「しかし!シグナムがそこまで言うのならやってみようではないか」
「ほんとですか!しかしどうやっ——ひやっ!?!/」フニユフニユ

シグナムの背後に回り込み後ろから胸に手をまわす。

「あああ、主メリオダス!こ、こ、これは一体!?!」

「落ち着けシグナム。寸法を測っているだけだ」フニユフニユ

「す、寸法をですか...?」

「強くイメージするためにはより正確な寸法を知る必要がある」フニユフニユ

「んっ!//し、しかし...」

「それともその甲冑のままでもいいのか?」ピタッ

「...や、優しくお願いします...」

はい、言質取った。

「じゃあいくぞ」

フニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユ

フニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユ
ニユ

「んっ！あっ！／＼／＼あ、ある・・・じ…」

「フムフムフム」

フニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユ
ニユ

フニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユ
ニユ

「んんっ！／＼／＼」

「これは中々・・・」

フニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユフニユ
ニユ

フニユフニユフニユフニユフニユ——

「いい加減にしろーっ！」ガツンッ！

横からの衝撃で地面を数度バウンドさせられた。

気をとられ過ぎて殴られるまで気が付かなかった。

「だ、大丈夫ですか!？」

「こ、この変態！エロガツパー！スケベ！嘘つき！」

心配して駆け寄ってきたシャマルに起こされればハンマーを担いだヴィータが顔を真っ赤にして罵詈雑言を浴びせてきている。

今にも襲い掛かってきそうだがザファイラが必死に抑えている。

シグナムは・・・膝について肩で息をしてるな。

ちとやりすぎたな、反省。

「すぐに治療しますから・・・えっ？傷がない…」

「丈夫なのが取り柄なのさ」

さて、流石にシグナムには悪いことしたな。

強いイメージだったよな。

こういうのは苦手なんだよなあ。

・・・！！

——ポンッ！

「こんなもんか」

シグナムの甲冑が残念ながら露出度控えめのものへと変わってしまっただ。

「へっ？ほ、ほんとに変わった……嘘じゃなかった……？」

それをみたヴィータが目を丸くして俺とシグナムの方を交互に見る。

その後すぐにサーッと顔を青くし、ハンマーを落としてこちらに駆け寄ってくる。

「ご、ごめん……！あ、あたし勘違いして……は、はやく手当てを——」
「必要ねえ」

「う、うそだ！かなり強めに振ったんだ……！そんなわけ！」

かなり動揺しているのか今にも泣きだしそうな顔して俺の心配をしてくる。

「大丈夫よ、落ち着いてヴィータちゃん。もう大丈夫だから」

「……ほんとに？」

「ええ、ほんとよ」

シヤマルが抱きしめ、やさしく言葉をかけることでヴィータは落ち着きを取り戻し始めた。

そして俺に何か言いたげそうにチラチラとこちらの様子を伺っている。

「シヤマル、少し外してくれるか」

「はい、わかりました」

ヴィータが言いにくそうにしていたためシヤマルには少し外してもらおう。

すると少ししてからヴィータが口を開いた。

「ごめんなさい……その……あたし、メリオダスが寸法なんかしてないんじゃないかって思って……それで……」

申し訳なさそうなヴィータの顔を見てるとさすがに罪悪感が湧いてくる。

「気にすんな、今回ののは俺が悪い」

実際俺が悪いからなー。

自業自得ってやつだ。

しかしまさかこんなことになるとは…自重するか。

「でも…」

あー、こいつめちやくちや真っ直ぐなタイプか。

このままだと落ち込みっぱなしだな。

……よし。

「それに、実際あんなに揉む必要はなかったのは事実だしな」
「なっ!？」

「そうだな、次はシャマルの寸法を——」

「こ、この……」

「ん？」

「変態がーっ!!」

そこにはハンマーを振りかぶる元気なヴィータの姿があった。

「おっと、あぶね」

「避けんな！」

それからしばらくはヴィータのハンマーから逃げ続ける羽目になった。

「なあ、まだ街にはつかないのかー？」

「んー、あと半日ってとこだな」

あと半日か…

起動してから早数日、街を目指して歩いては狩りをしての繰り返し。

歩いても歩いても草原しかない。

ほんとに街なんてあるのか？

「それにしても本当に広い草原ですねー」

「ああ、時期によっちゃ一面花畑だろうよ」

そう話すメリオダスの顔はなんだか楽しそうだ。

好きなのかな？

ちよつと以外だ。

「主メリオダスは花がお好きなのですか？」

シグナムもそう考えてたのか、聞こうと思っていたが先を越された。

少しでも知っておきたい気持ちは同じだな。

「花？そーだなー、育てたりとかは無理だが見んのは嫌いじゃねえ」

「あつ、じゃあ街にいたらお花屋さん行きませんか？大きい街ならきつと種類もたくさんありますよ」

「宿さがしてからな」

アタシ達が今日指してる街はこの次元世界では大きい規模だそうだ。

といつてもこんなだだっ広い草原が広がっているところを見るとあまり文明レベルは高くないのかも。

「あつ、その前にお前らの服買わないとな。いい加減甲冑だけじゃ嫌になってくるだろうし。それで服買った後は祝いの意味も込めてうまいもんでも食うか」

「祝いつてなんのですか？」

「そりゃあ仲間が出来た祝いに決まってんだろ。久しぶりにたらふく

飲んじまおっと」

そう言つてニシシと笑いかけてくる。

……やっぱり変わつてる。

(今までの奴らとはてんで違う)

今までこんな風に笑いかけてきた奴なんていなかった。

蒐集もしないと言うし、命令もしてこない。

戸惑いがないと言えばウソになるけど……

(悪い気はしないな)

こいつは私たちという存在をみている。

ただの物ではなく、仲間として。

それだけのことがうれしいんだ。

それはきつと皆も同じだ。

(初めてだ……)

義務じゃなく、自分の意志で守りたいって思えたんだ。



「おお！でつかー！」

「ヴィータ、あまり大きな声をだすな。確かに大きいが……」

小さな丘を終えると目的地である街が見えた。

その規模は予想よりも大きい。

街というよりも国だな。

「思ったより全然大きいじゃん！」

「外壁も高いですね〜」

「造りも頑丈でしつかりしているのがここからでもわかるな」

それぞれ思ったことを口に出している。

皆驚いていると言う事だろう。

「ここで見つかるかもな……」

その中で主だけが目を細め、街を見つめていた。

街に入ってみれば人、人、人。
凄い賑わいだ。

それにしても・・・

(先ほどの言葉、主メリオダスは何かを探しているのだろうか?)

ここ数日で私は初めて主の真剣な表情をみた。

余程大事な探し物なのだろう。

何かお力になれば良いのだが・・・

しかし、私が立ち入って良いものなのか・・・?

「シグナム?」

「ど、どうかなされましたか主メリオダス」

「いや、難しい顔してたからどうかしたのかと思ってよ。体調悪いのか?」

「あつ、いえ…そういうわけではないので大丈夫です。ただ少し人の多さに気圧されしまいました」

「そうか、ならいいんだけどよ」

咄嗟に嘘をついてしまった。

・・・主に心配をかけてしまうなら素直に聞いておくべきだろう。

「・・・主メリオダス、一つお聞きしてもよろしいですか・・・?」

「ん?なんだ?」

もし、お前には関係ない、必要ないと言われたなら・・・

私はどうすればいいのだろうか・・・?

私に価値はあるのか・・・?

「その・・・この街でなにを——」

「おーい、二人ともなにやってんだよー!はやく行こうぜー!」
遮るようにヴィータの大きな声が聞こえてきた。

気が付けば私と主以外は既に先に進んでいた。

「気の早い奴らだな。で、シグナム。今なんて言った?」

「いえ、やはり大丈夫です。大したことではありませんので」

「?まあ、いつか。行こうぜシグナム」

結局聞くことができなかった。

私は結構小心者らしい…

そんな自分の未熟さを感じながら主の後を付いて行く。

その途中皆に念話を飛ばす。

『お前たち自分たちの使命を忘れているのではないか?』

距離が離れていてはとっさに主を守れないではないか。

主がやさしいと言えど少し気が抜けすぎだ。

『アタシは二人が進んでたから…』

『ご、ごめんなさい。綺麗なお店があったからつい…』

『俺はてつきり主の通る道に危険がないかの確認だと思ったのだが、

お前たち…』

はあ、頼りになるのだが抜けてるところがあるのが玉に瑕だな。

「お前ら、この人の量で知らない街なんだから先走ると迷子になるぞ

?特にヴィータ」

「ならねえよ!」

「冗談だ冗談、ははは」

主はヴィータと戯れるのがお気に入りようだ。

きつと子どもが好きなのだろうな。

「そんじゃ、服買いに行きますか」



「メリオダスちゃん、お洋服ありがとうございます」

「気に入ったの買えてよかったな」

「はい!」

手に持った紙袋の中身を覗き見るとつい笑みがこぼれちゃう。

主であるメリオダスちゃんが選んでくれたのがまたうれしくて、うれしくて。

(ふふっ、皆嬉しそう)

「はやく宿探して着替えようぜ!」

「落ち着けヴィータ。袋を落とすぞ?」

「そういうお前も早足だぞ? シグナム」

「む、そうか?」

こんなこと今までなかった。

事務的でも高圧的でもない、心ある言葉をかけてくれた。

ましてや仲間と言ってくれた。

「シヤマル、泣いてんの?」

自然とポロポロと涙が溢れては落ちてく。

やだ、私ったら…

「だって、メリオダスちゃんが優しいんだもの」

「それにしたって泣くことはねえだろ? 大げさだな」

「大げさじゃありません! それほどうれいんです!」

「お、おう…」

ああ、もう!

本当に止まらなくなってきた。

「はあ…大の大人がいつまでもそのままじゃみともねえ。これ使え」

そう言つて自身のスカーフをこちらに渡してくるメリオダスちゃん。

またそんなこと…

「う、うわくん! 私メリオダスちゃんが主で良かったです!」

「ほんと大げさだな」

「大げさじゃないです!」

「わかったわかった。とりあえず周り見て見ろ?」

「?」グスツ

皆こっち見てる…?

…あつ…

「お、お騒がせしてごめんなさい!? 喧嘩とかではないので大丈夫ですから!」

そりやあ街中で泣いてたら注目浴びますよね…

あらぬ誤解が生まれてそう…

「本人が言ってるんなら大丈夫か、行こうぜ」「そうだな」

「泣いてるもんだから驚いちゃったけど大丈夫そうね」「おねーちゃん元氣出してね〜」

「坊主、あんまり姉ちゃん困らせんなよ？」

「俺はガキじゃねえっての」

ふう、とりあえず誤解はなさそう。

「すいません…お恥ずかしいところをお見せしました…」

「まあ、いいさ。泣くほど喜んでもらったんだからな」

「メリオダスちゃん…」グスツ

「おいおい、流石に二度目は勘弁してくれ…」

「シャマル、少しこちらで落ち着け。主メリオダス、シャマルが落ち着いたらヴィータとザフィーラの魔力を感知して追いつきますので」

「そうか、なら任せた」

シグナムに手を引かれすぐ近くの路地へ。

そうよね、いったん落ち着かないとね。

「どうした？多少涙もろいとは知っているがここまでではなかっただろっ？」

「今までこんなことなかったから」グスツ

中々止まってくれないからもう少し時間が掛かっちゃいそう。

皆には迷惑かけて申し訳ないわね。

「語り掛けてくれたり、私たちの為に物を買ってくれたり、仲間と呼んでくれたわ」

「ああ、初めてのことばかりだ」

「それで嬉しそうな皆の顔を見てたら私、すごく幸せな気持ちになつて…」グスツ

「シャマル…」

皆が笑っていられる。

皆で守りたいと思える。

そんな主によく出会うことができた。

「だからメリオダスちゃんで良かったって心の底から・・・」グスツ
「ストップだ。皆まで言わずとも我ら全員同じ気持ちだ。それにまた
泣かれては帰りが遅くなってしまう」

「うん・・・」

自分でもこんな涙もろいとは思わなかった。

これからはなるべく泣かないように気をつけないと。

「ところでシャマル、主メリオダスからこの街で何をするか聞かされ
たか？」

「ううん、何も」

そういえば街に向かうとだけしか聞いてない。

「そうか……」

「シグナム……？」

「どうした？」

「ううん、なんでもない」

一瞬シグナムが暗い表情をした気がする。

気のせいかしら？

「さて、そろそろ戻るとしよう」



「シグナムの元気がない？ そのようには見えんが」

「うん、私の気のせいかもしれないけど・・・」

宿に着いて着替えを終えた後シャマルから相談を受けた。

なんでもシグナムが何か悩んでいるのではないかということだそ
うだ。

「いや、お前が言うのなら恐らく間違いじゃないだろう」

ヴォルケンリッターの中で一番周りを見ているのはシャマルだ。

そのシャマルが言うのだから間違いではないだろう。

「それにシグナムは抱え込む悪い癖がある。今回も十中八九そうだろ

う」

「確かにそんな感じだったかも。どうしたらいいと思う？」

「ふむ、シヤマル、まずどんな時にシグナムに違和感を覚えた？」

「ええつと・・・シグナムから質問されて、それに答えた後の一瞬だけよ」

質問？

移動中それらしい会話はなかったから路地に二人で残ってたときか。

「因みにその質問の内容は？」

「メリオダスちゃんがこの街でなににするか知ってるかって質問だったわ」

「言われてみればこの街で何をするのか俺は知らないな」

「私も知らなかったからそう伝えたわ」

・・・なるほど

大体のことはわかった。

「またシグナムらしい悩みだな・・・」

「わかったの!？」

「恐らくだがな、行くぞ」

「えっ?どこへ?」

・
・
・

「シグナム、ヴィータ、入るぞ」

「ザフィーラか、いいぞ」

部屋に入ればヴィータはおらず、シグナムはレヴァンティンの手入れをしていた。

「あれ?ヴィータちゃんは?」

「護衛を兼ねて主メリオダスの所にいる。それでどうしたザフィーラ?」

「お前に少し話があつてな」

「私に?」

レヴァンティンを机に置き、こちらを向く。

「単刀直入に言うが悩みがあるのだろうか？」

「・・・なんだ唐突に」

少しだけ視線が泳いだ。

相変わらず嘘をつくのが下手な奴だ。

「隠さなくてもいい。主から目的を聞かされていないから不安なのだろうか？」

「!？」

「やはりな」

「あつ、もしかして・・・」

どうやらシャマルもピンと来たらしい。

「我らは主の目的を知らない。それを我らが信頼されてないと思ったのではないか？それか我らの力不足だと」

「・・・その通りだ・・・」

「でもメリオダスちゃんはお私たちの事を——」

「わかっている。主メリオダスはお優しい方でとても良くしてくれている。だからこそお力になりたいのだ！しかし、主メリオダスは我らには語ってくれない。恐らくそれは我らの力不足だからだ・・・」

「そ、そうとは限らないじゃない。直接聞いてみれば・・・」

「その時にもし我らの力が必要ないと言われたら？我らはただのお荷物だ。何の価値がある？」

「それは・・・」

我らが存在できるのは僅かにだが主から魔力をいただいているからであり、その上我らの分の生活費も掛かる。

「確かにその時は我らは不要な存在。しかし、我らはまだ主からそのような言葉を聞いてはいない」

シグナムは我らの為を想って悩んでいるのだろうか。

もしその言葉が返ってきた場合今の生活は終わりを告げるわけだからな。

しかし、そのような心配は無用。

『ヴィータ、主をこちらに案内してくれ』

『ん？わかったー』

「ザフィーラ何を!？」

「決まっている。これから主に直接目的をお伺いする」

「本気か!?もし——」

「何を狼狽えている!それでも我らが将か!」

「!」

「お前も知っているはずだ。我ら皆歴戦の騎士。力量不足と言われるほど弱くはない!そして——」

シグナムが知っているように我々も知っている。

「我らが将がその程度のはずがないと!」

「ツ!・・・そうだったな。濟まない、忘れるところだった」

「シグナム」

「シヤマルにも心配をかけたな。だがもう平気だ。私は烈火の将シグナム!必ずや主の力になる存在!」

「フツ」

目に力が戻ったか。

もう何も心配は要るまい。

「連れてきたー・・・ってどうしたんだよシグナム。すごいやる気に満ち溢れてるけど・・・」

「いや、他の二人も相当だぞ」

ヴィータが主をお連れしてきた。

いいタイミングだ。

「主メリオダス、お聞きしてもよろしいでしょうか?」

「お、おう」

今のシグナムに迷いなどない。

いけ、シグナム。

「この街での主メリオダスの目的を教えてくださいませんか?」

「そういうば聞いてないなアタシも」

「・・・」

主はしばらく考えこむと口を開いた。

「そーいや言っただけなかつた気がすんな。いや、すっかり忘れてた」

「それで、その内容とは？」

「うーん、自分探しってとこだな。俺、記憶喪失だからよ」

「えっ!?」「マジ!?」「!?」「ええ!？」

なんと・・・そうだったのか・・・

「わかってるのはメリオダスっていう名前と少しのことだけだ」

「・・・」

「おいおい、暗い顔すんなって。名前わかっただけマシなんだからよ」

なんと前向きなのだろうか。

といってもさざらりと言う内容ではないと思うのだが・・・

「我らも何かお力になれないでしょうか・・・？」

「うーん、手伝ってくれるってのはありがたいけどいいのか？」

「はい！是非とも！」

しかし、記憶喪失か・・・

何をすればよいのだ？

「シヤマルは治療系得意だろ？直してやれないのか・・・？」

「さすがに記憶はちよつと・・・」

「何か手掛かりはありませんか？」

「手掛かりつつつとへ七つの大罪ドラゴン・シンっていうキーワードとか
〈憤怒の罪〉って呼び名とかだな」

「なるほど、まずはそのキーワードをもとに情報を集めるしかなさそうだな」

「アタシ色んなやつに聞いてみる！」

「じゃあ私は書籍を調べてみるわね」

「ザフィーラと私も聞き込みだな」

できることから始めるしかあるまい。

「そんな頑張らなくてもいいぞ？街を楽しむついでぐらいでいいからよ」

「自分のことなんだからもっと真剣に頑張れよ！アタシ達も頑張るかー！」

「いやいや、ついでぐらいでいいって。なんせもう500年は探して

んのに手掛かりもこれだけだからな」

「「「……」」」

聞き間違いか…？

いや、そうに決まっている。

「ご、500年って今言わなかったか…？」

「おう、言ったぞ」

どうやら聞き間違いじゃないらしい…

思わず他の皆と顔を見合わせてしまう。

「「「ええええええ!?!」」」

我が主は我らよりも長い歴史を刻んでいたのだった…

「突然だが資金が底を尽きた」

「へっ？」

時刻は朝の7時前、全員を集めたところでメリオダスが重大発表をかました。

「明日を生きる金もない」

「と、突然過ぎんだろ!？」

「だから突然だがって言っただろ？」

慌てるヴェータに対してメリオダスはとても冷静に切り返す。

他三名は暗い表情だ。

「あ、あの・・・メリオダスちゃん・・・」

「その原因はもしかしなくても・・・」

「我々のせいでは・・・？」

ヴォルケンリッターの仲間入り。

つまり四人分の生活費が増えると言う事だ。

それは万年金欠のメリオダスの資金力ではどうあがいても無理があった。

「気にすんな、必要経費つてやつだ。それにこうなるのは最初から分かっていたしな」

「つてことは何か解決策が・・・？」

「もちろんある。というかこの街に来た目的の九割は当分の資金を得るためだしな」

それを聞いたヴォルケンリッターは一安心といった表情。

困みにももちろん残り一割は記憶の手がかりである。

「でもどうやって？」

「ここはでかい街で自然と人は集まる。人が増えりや、さらに栄えるがその分問題も多いのさ」

「つまり、その問題を解決することによって資金を得ると言う事ですね」

「その通り。だからまずは酒場に行くぞ。大抵酒場に行けば問題は転

がってるからな」

宿を出るとメリオダスは迷いなく歩き始める。

場所は前日調べておいたからだ。

「ずいぶん手慣れてますね」

「そりゃそうさ。もう五百年はこうして旅をしてるからな」

「五百年・・・改めて聞いてもすごいわね・・・」

「五百年前というとまだベルカが住める土地だった頃だな・・・」

「メリオダスちゃんも旅で行ったことありますか？って、戦乱だったから行くわけじゃないですよ」

「いや、あるぞ。というか一時期は騎士もやってたしな」

メリオダスの放った言葉にヴォルケンリッターは絶句する。

なぜならベルカにおける〈騎士〉とは魔法使いの中でも上位の実力を持つ者に与えられる称号だからだ。

彼女達もまた騎士であるが故その重みを理解している。

「そ、それって本当なのか!？」

「本当だ。魔法は苦手だったけどな」

「では、なぜ——」

「着いたぞ。昔話はまた今度だな」

ヴォルケンリッター達は疑問はあるものの主がそう言ってしまったのでは仕方がない。

それに今は自分たちの為に尽きてしまった資金をどうにかしたいという気持ちの方が勝ったのだった。

「ほんとにいつぱいあるんだな」

酒場に置いてある掲示板を見上げるヴィータ。

そこには20枚ほどの依頼書が貼られている。

一つの酒場でこれならば、街中のすべてを合わせるとんでもない数になるだろう。

「ペット探しに、仕事の手伝い、街の清掃業・・・ほとんどが他愛ない

ものだな」

——その方が良いのだがな

そう言いながらシグナムは依頼書を見ていく。

「しかし、我らには資金が必要だ」

「といつても高そうな依頼はなさそうね…」

「じゃあどうすんだ？」

ヴォルケンリッターが掲示板の前で頭を抱えているとメリオダスが近づいてくる。

「主メリオダス、ここでは期待に添えるような依頼はないように思えます」

「ああ、大丈夫大丈夫。でけえ依頼があつからよ。ザフィーラ、ちよつとついて来てくれるか」

「勿論です」

メリオダスはザフィーラを連れ、カウンターに向かって行く。

カウンターの向こうにはこの酒場のマスターがいる。

『ザフィーラ、これから俺が念話で話す通りに喋ってくれ』

『わかりました』

マスターの目の前の席にザフィーラはドカツと座り、喋り始める。

『おい、少しいいか？』

「注文は？」

『でかい依頼を一つだ』

「・・・依頼ならあそこにあるので全部だ」

『下手な嘘だな。俺の予想では依頼は流通に関すること・・・違うか？』

『!』

『!』

その一言にマスターは驚く。

『商人が愚痴をこぼしてたぜ？最近バケモンが出て仕入れ値が上がってやがるってな』

(この男…なかなか)

『大方そいつを退治するっていうのが依頼だろう。それを俺にやらせてほしい』

「・・・わかった、これが依頼書だ。サインは既にしてある」
『いい判断だ』

依頼書を受け取るとザフィーラは席を立ち、外に出る。

その後にくよくよのようにメリオダスたちも店を出た。

「ナイスだザフィーラ」

「いえ、これも主のお言葉のおかげ」

「いやいや、俺みたいなのが言うとは全然話が通じなくてよ。いつも依頼書にこぎ着けるまでが一番苦労すんだ」

子供にしか見えないメリオダスは酒場に入ることすらいつもは一苦労なのだ。

それを依頼を受けたいなどと言われても子供のお遊び程度に取られてしまうのは仕方ないのかもしれない。

「そもそもなんで解決してほしいのに依頼書を隠すような真似してたんだ？」

「恐らくは金に目がくらんだ者達への対策だろう。実力がないものが討伐に赴いたとしても犠牲者が増えるだけだからな」

「で、そこで採用された方法がへ自分たちで見極めるってな訳」

「へえー、なんか色々めんどくさいんだな」

「そうじゃなきゃシステムが成り立たないしね」

「まっ、ガキには難しい話だったな」

「ガキじゃねえよ！」

「落ち着いてヴィータちゃん。メリオダスちゃんもあまりヴィータちゃんをからかわないで上げてください」

「面白くてついな。悪かったなヴィータ」

「・・・フンっ！」ムスー

からかわれたことでヴィータはご機嫌斜め。

どうしたもんかと考えるメリオダス。

「そう怒るなって」

「別に！怒ってんじゃなくて呆れてるだけだし！」

「じゃあ、見直せるようにこの依頼ですげーもん見せてやるよ。ぜってえ驚くぜっ！」

「・・・どうだか」

そう言うものの内心は興味があるため、チラリとメリオダスを見てしまうヴィータであった。

(これは主メリオダスの実力が見れるのでは！)

そしてヴィータの横でそれ以上に期待している者もいた。

・
・
・

「ここら辺だな」

街から数キロ離れた場所にメリオダス達は来ていた。

被害の多くがここら一帯で襲われていたためだ。

「依頼書では全長20メートルほどの虫だそうですね」

「絶対気持ち悪い・・・」

「見当たりませんか？」

周りを見渡すもそれらしき生物などいない。

ここは草原、それほどの巨体が隠られる場所などないはずなのだ。

「そもそもそんな巨体じゃ、襲われる前に気づけたはずだ。それが出来なかったってことは・・・」

メリオダスの視線は下、すなわち地面に向く。

そして拳を握り、腕を振りかぶると・・・

「ここしかねえ！」

そのまま拳を地面に叩きつけた。

その威力にあたり一帯が揺れる。

「無茶苦茶すぎんだろ!？」

「これが主メリオダスの実力なのか!？」

「うそつ・・・魔法すら使わずに・・・!」

「何というパワーだ・・・!」

拳一つで小規模ながら地震を起こすメリオダスに対しさすがのヴォルケンリッターも驚愕背ざる負えない。

「さあ、お出ました」

メリオダスの起こした揺れとは違うもう一つの振動が大地を揺らす。

それは地面を盛り上げ、姿を現した。

「うへえ…気持ちわる…」

「こりや、30メートルはくだらねえぞ?」

近しい生物は何かと言われればムカデだろう。

全長は依頼書に書かれていたものを遥かに超えており、

その無数の足がウネウネと動くさまは不快な気分させるには十分すぎるものだった。

《G a a a a a!》

ムカデは巨体をうねらせ、あたり一帯を無差別に破壊していく。

メリオダスたちは巻き込まれないように大きく後ろに跳ぶ。

「あつぶな。あいつ相当キレてるみたいだな」

「地表であれだけ揺れたのであれば地中ではより揺れたはずです」

「あはは…それは怒りますよね…当然…」

「どうする? ギガントで一気にやつちまうか?」

「確かにヴィータのギガントが最適だ」

ヴィータは既にハンマー型デバイス「グラーフアイゼン」を構えている。

それはカートリッジを用いることでギガントフォルムと呼ばれる身の丈のおよそ十倍ほどのハンマーとなる。

それを喰らわせれば巨大ムカデであろうとひとたまりもないだろう。

「うんにや、その必要はねえ。俺一人でやる」

「はあ!? 確かにあの馬鹿力はすげーし、驚いたけど無茶すんな!」

「ちつちつち、俺はまだとっておきを見せちゃいけないぜ? まあ、みてろって」

余裕を見せるメリオダスの背後でムカデの口元に魔力を溜まってい

く。そして凄まじい速度で溜めたその魔力弾をムカデはメリオダスに向けて放った。

依然メリオダスはヴィータの方を向いている。

《G a a a a a a !》

「バカ!?後ろ!!」

一切避ける素振りを見せないメリオダスにヴォルケンリッターは驚愕し、一斉に駆け付けようとする。

(くっ!間に合わんツ!)

しかし、避けることは難しくない攻撃と先ほどのメリオダスが見せた実力の片鱗、それらがヴォルケンリッターの反応を僅かに遅らせた。

既にメリオダスの真後ろには魔力弾が迫っていた。

次の瞬間に魔力弾に飲み込まれるメリオダスの姿がヴォルケンリッターの脳裏に走る。

チンツ

フルカウンター
「【全反撃】」

しかし魔力弾は鏗鳴りの音と共に数倍に膨れ上がり、跳ね返された。

攻撃範囲も広がっているそれを避けることが出来ずムカデは飲み込まれた。

「いっちょあがり!ってな」

圧倒的威力にムカデは断末魔すらあげずに消し飛んでしまった。

そしてメリオダスはヴォルケンリッターの方を向きニカツと笑う。

「な?言っただろ。とっておきがあるって」

「.....」フルフル

「どうした?寒いのか」「バカー!!」ってハンマー振り回すな」

「そういうのあるなら最初から言えってんだ!バカ!」

「そうですよ!私、心臓止まっちゃうかと思いましたがもん!」

「主メリオダス、もう先ほどのようなことはおやめください」

「主、俺も同じ意見です」

「ちよっ...」

前後左右、四方向からそれぞれヴォルケンリッターにグイグイと迫られる。

これにはメリオダスも少し困ってしまう。

「わ、悪かったって。もうやんねーって」

「ほんとですか？」

「ほんとほんと。だから落ち着けて、な？」

そうしてようやくヴォルケンリッターから解放されたメリオダス。

しかし、落ち着いてくると自然と疑問が思い浮かぶ。

「でもどうやって跳ね返したんですか？魔法も使っていたように思えないんですけど」

「しかも威力は数倍に膨れ上がってな」

「それはだな」

剣を引き抜き、一振りして見せるメリオダス。

「こうやって斬ったのさ」

「……からかっているのか？そんなんで跳ね返せるかよ」

「……主メリオダス」

「……冗談だ、冗談。そうムスツとするなって」

「それで一体どうやったのですか？」

「それはだな——」

メリオダスは自身の魔力【全反撃】フルカウンターについて話した。

それを聞いてヴォルケンリッターはさらに驚く。

「攻撃的魔力を倍以上のものして跳ね返す……」

「しかも魔力も使わない、全くゼロの力では……」

「反則じゃね……？」

「でも魔力【全反撃】フルカウンターって変じゃないですか？そういう魔法じゃなくて魔力自体がそういう性質ってことですよ？そんなの聞いたことないです……」

「そういや昔にもそんなこと言われたな」

自分以外に魔力にそこまでの性質があるものにメリオダスはあつたことがなかった。

それほどメリオダスの魔力は珍しいのだ。

「主メリオダス、一つ我が儘をお許しいただけないでしょうか？」

「「あっ…（察し）」」

「なんだ？」

「私と手合わせしてもらえないでしょうか？」

そう言うシグナムの表情はとても生き生きしており、メリオダスを見る目は期待で溢れてる。

(あくあ、またシグナムの悪い癖が出たよ)

(あいつはバトルマニアだからな・・・)

(巻き込まれないように今のうちに下がって置こつと)

先ほどのメリオダスの動きと今の魔力の凄さでシグナムは完璧に火がついてしまっていた。

待ちきれないと言わんばかりにうずうずとしている。

「手合わせ？いいぞ、ちょうど動き足りなかったしな」

「ありがとうございます！ではさっそく」

「ああ、来い」

お互い五メートルほど離れ、構える。

シグナムは剣を、メリオダスは拳を。

(剣は抜きませんか。ならば抜かせるまで！)「はっ！」

先に仕掛けたのはシグナム。

剣による連撃がメリオダスを襲う。

「よっ、ほっ、うりゃっ！」

しかし、その連撃をメリオダスは軽々とかわしていく。

そして回避していくほどその動きが最小限になっていき・・・

「隙あり」

メリオダスはカウンターで拳を突き出した。

「いいえ、隙はありませんよ」

「うおっ！」

予想通りと言わんばかりにシグナムは拳をかわし、さらにカウンター気味に剣を繰り出す。

その剣は惜しくもメリオダスを捉えられないがメリオダスを後退させた。

「流石ですね、今のを避けられるとは」

「いや、今のは惜しかったぜ？」

僅か数秒、互いに牽制に留まった。

だというのにシグナムだけでなくメリオダスも笑みをこぼしてしまふ。

「おいおい、あいつもかよ・・・」

「シグナムと合わせて苦労が倍だな・・・」

「まあ、お互いで相手できるからいいんじゃない・・・?」

それを見ている三人は今後のことで頭を悩ませる。

そしてそんなことには気が付くはずもなく再び二人は衝突する。

「今度はこっちから行くぜ?」

今度はメリオダスから仕掛けていく。

最短で真っ直ぐに一直線にシグナムに突っ込む。

対するシグナムはその場から動かさず剣に手を添えるのみ。

(速いが・・・愚直!)

メリオダスが間合い入った瞬間、下から上への斬り払い。

その超速抜刀がメリオダスを捉え、真っ二つにした。

「!?」

・・・かのように見えた。

斬られたメリオダスが幻想のように消えたのだ。

「残像ってやつだ」

「ッ!」

声が聞こえ、振り返ろうとするシグナム。

しかしその暇もなく空中へ吹き飛ばされた。

背中への強い衝撃と痛みがシグナムへ攻撃されたことを理解させる。

る。

飛ばされる瞬間、微かに捉えたのは脚を振り上げたメリオダスの姿。

シグナムは飛ばされながらなんとか剣の切っ先をメリオダスに向けてる。

「くっ、レヴァンティン!」

主の声にレヴァンティンが応え、魔力弾が放たれた。

攻撃後の隙と予想外の攻撃にメリオダスは避けられない。

「忘れたわけじゃねーよな?」

が、メリオダスには【全反撃】フルカウンターがある。
剣を引き抜き、一閃。

魔力弾は数倍になってシグナムに直撃、爆発した。

「ちよつとやりすぎちまったか？」

空を見上げながらメリオダスは呟く。

盛大に爆発したため、煙でシグナムの姿は確認できない。

「おーい、シグ——！」

声をかけようとした瞬間、煙の中から蛇のように何かが出てきた。

それは連結刃と呼ばれる刃を備えた鞭であり、メリオダスを拘束するように巻き付いた。

「何だこれ？」

「レヴァンティンの別形態へシユランゲフォルム」と言います。ご存知でしょうがカートリッジシステムの変形機構です」

煙が晴れていき、シグナムの姿があらわになる。

その姿は多少傷ついているものの戦闘には差し支えないものだった。

「なるほど、でもなんでピンピンしてんだ？ 戦闘不能程度にはなつて
と思うただけだよ」

確かに【全反撃】フルカウンターによる魔力弾は直撃した。

それだというのにシグナムにはほとんど傷はない。

「あらゆる攻撃的魔力を数倍にして跳ね返す、確かに強力です。ですがそれは自分から攻撃はできず、威力は相手の魔力に依存すると言う
事です」

「こんにやろ、わかってて魔力を最低限に抑えたな」

自身の魔力を逆手にとられ、拘束までされているというのにメリオダスの顔は笑っている。

心の底から楽しんでるのだ。

「はい、上手くいきました。まあ、実力を抑えるというのは不慣れで少しもらってしまいましたかね」

それはシグナムも同じだった。

普段の笑みとはまた違う笑みがこぼれる。

「名残惜しいですがあとは魔力を流し込めば私の勝ちです」

「そいつはどうかかな？うしろ見て見ろよ、とつておきだぜ？」

「とつておき？」

メリオダスは今完全に拘束され、身動き一つとれない。

いまさらこの状況を変えられるとは思えないシグナム。

しかし、メリオダスがとつておきというのだから気にはなった。

「あ、主メリオダス!？」

「よっ!」

後ろを見たシグナムの視界には軽快に挨拶してくるメリオダスの姿があった。

(馬鹿な!?!拘束は完璧なはず!?)

「やっほー」

急いで振り返ればそこにはちゃんと拘束されたメリオダスがいる。

つまりシグナムの前後にメリオダスが同時に存在しているということになる。

(主メリオダスが二人!?!一体どういうことだ!?)

「悪いな、シグナム」トント

「くっ……」バタンツ

動揺するシグナムにもう一人のメリオダスが首筋への当て身を決めたことで勝負はついた。

「ほいつ」

ズサーー!

土煙を立てながら派手に転がされる者が一人。

すぐさま体勢を立て直そうとするがその動きは止まる。

倒れた首元に剣の切っ先が突き付けられたからだ。

「くっ……参りました…」

「うしっ、これで俺の28戦中28勝だな」

勝者である少年——メリオダスはニシツと笑って手を差し伸べる。

「まったく、主メリオダスには驚かされてばかりです」

手を取り立ち上がるはシグナム。

その表情は悔しさが多少あるものの満足気だ。

「おーいー!ご飯できたぞー……ってまたずいぶん派手に暴れてるな…」

二人を呼びに来たヴィータはこの場所の惨状を見て呆れる。

地面にはいくつものクレーターに周りには倒れている木々や粉砕

されたであろう巨石。

知らないものが見たら腰を抜かしてしまう光景である。

「もうそんな時間か？」

「いきましよう」

「ちやんと手洗えよな」

ヴィータを加えた三人は川に寄ってから残り二人が待つ場所に戻る。

「戻った」

「あつ!おかえりなさい。もうお夕飯できてますよ」

「待たせちまったか？」

「いえ、つい先ほどできたところですから。今よそいますね」

大きな丸太のテーブルを囲むように座っていく面々。

そこでシグナムを見たザファイラが呆れ気味に言う。

「シグナムまた随分と派手にやっていたようだな」

今のシグナムは鎧を解除し綺麗な私服を着ているが少し埃っぽい。
途中の川で最低限は洗ったが嗅覚の鋭いザフィーラには気になる
ようだ。

「奮闘のためだ仕方あるまい」

「奮闘、なるほどそれは仕方あるまい。では勝敗は？」

意地悪く聞くザフィーラ。

「・・・聞くな」

「やっぱ負けたのか。毎日よくやるよな」

ヴィータの言う通りメリオダスとシグナムの手合わせは、初めて手
合わせした日から毎日行われている。

そして今のところメリオダスの全勝である。

「ヴィータ、お前もやるか？」

「・・・初日に自信無くしたよっ！」

「まあ、確かにあれは・・・」

「ヴィータの気持ちもわかる」

シヤマルとザフィーラも苦笑いしながら頷く。

「なんかしたっけか？」

「思いつきりやられたんだよ！思い出してみろ！」

・
・
・
シグナムとの手合わせ後

「・・・！」

「起きた？」

「シヤマルっ！なにが起こった!?あ、主メリオダスが！」

「お、落ち着いて。それについては私たちもしっかり見たわ。メリオ
ダスちゃんも二人いるのをね。私達も驚いて聞こうとしたんだけど
・・・」

「シグナムが起きるまではネタばらししないって言うんだよ。もった
いぶっちゃってさ」

「ヴィータ、主にも考えがあるのだ」

「いや、そんな大層なもんじゃねえよ。ただ身をもって体験したシグナムが最後に聞くつてのは違うと思つてな。それにいつぺんに話した方が楽だろ?」

「絶対最後のが一番の理由だろ…」

「・・・そんなことねーよ」

「じゃあ、その妙な間はなんだ?」

目を逸らすメリオダスをジト目で見つめるヴィータ。

そんな光景に苦笑しながらもメリオダスを見たシグナムが気づく。

メリオダスの右頬が手の形に赤くなっている。

「主メリオダス、その頬はどうしたのですか?」

「これか?これはだな・・・」フニツ

「ひやつ!?／／」フニツ

「こうシグナムの心音を確認していたらだな・・・」フニツ

「この変態があー!!」

バチンツ!

ヴィータの振りぬいたビンタがメリオダスの顔に直撃し、シグナムから引き剥がされる。

起き上がったメリオダスの左頬には右頬についている手形とそっくりの跡がある。

「こういうことだ」キリツ

「かっこつけるところじゃねえ!」

「と、まあこのようなことが先ほどもあったのだ」

追撃を仕掛けようとするヴィータを捕まえながらザフィーラが答える。

「な、なるほど…／／」

「はいはい、ヴィータちゃん落ち着いてく。どうどうく」

「アタシは馬か!?!」

「あつ、やっぱりだめ?」

「逆になんていいと思つたんだよ!」

ヴィータを鎮めようとするシャマルだが逆効果。

ヴィータの怒りを大きくする一方だった。

これにはシグナムも呆けてはいられない。

「まあ落ち着けヴィータ。主メリオダスは私の心配をしてしてくれただけで過剰に反応しては失礼だろう？私は気にしてなどいない」

ヴィータの頭をなでながら優しく微笑みかけるシグナム。

そんな顔をされてはヴィータもおとなしく従うしかない。

「・・・わかったよ」

「うむ、いい子だ」ナデナデ

「こ、こども扱いすんな！／＼／＼」

そつぽを向き悪態をつくヴィータだが赤くなつた耳をみれば満更ではないことはバレバレだった。

シグナム以外にはだが・・・

「おつとすまない。そうだな、お前は立派な騎士だからな」

「あつ・・・」

シグナムの手が頭から離れた瞬間名残惜しそうな声がぽつりと零れた。

「ヴィータ？」

「べ、別になんでもねーよ！／＼／＼」

「あらあら、ヴィータちゃんたら素直じゃないんだから」

「全くだな」

「ガキだな」ニシシツ

「う、うるさいうるさいうるさい！／＼／＼ シグナム起きたんだから早く話せよー」

「いや、どういうことだ？私にも説明してほしい」

「なんでもねーから！？メリオダス！いいから早くさっきの増える技について説明してほしいなアタシ！」

「・・・たしかに先ほどの技について早く知りたいですね」

「なんとかそらせた・・・」

ぼそりと安堵の息をはくヴィータ。

それをみて十分楽しめたメリオダスも話を切りだしていく。

「因みにあれは俺の技じゃなく、このロストヴェインの能力【実像分身】だ」

そう言つて剣を抜くとメリオダスが五人に増える。

「今度は五人になつちやいましたね。一体何人まで増えられるんですか?」

「人数に制限はほぼねえな」

「ほぼ、ですか?」

「正確に言えば、限界はあるがまずそこまで増やすことはない」

「なんでだ? いっぱいいればそれだけ戦力が増すのに?」

「いや、そもいかんようだ」

「なるほど、先程から感じていた違和感の正体はそういう事か」

増えたメリオダスを見比べザフィーラが気づく。

それにつづきシグナムも納得する。

「どうやら気づいたみてえだな」

「えつ、えつ、何がですか? ヴィータちゃんも分かるの?」

「いや、まったく。ザフィーラということ?」

「主達のそれぞれの魔力量に集中してみる」

「?・・・あつ!」

「本物のメリオダスちゃん以外魔力量が随分と低いですね」

「つまり分身は分身という事だ。その実力は本物には遠く及ばない」

「ご明察! さすがザフィーラとシグナムは鋭いな。まあ、簡単にまとめるところだな」

・ロストヴェインの実像分身に人数制限はほぼない

・分身は本体の実力には及ばず、数が増えるほど実力はさがる

・本体の実力を1000とすると

分身一体ならば半分の500、四体ならばその四分の一の125となる

「それってあんま強くないね? 分身の強さ合計が実力の半分ってことだろ? 増やす利点ないじゃん」

「数値的に見ればそうだが、主メリオダスが使うと圧倒的凶悪さがある。なにせ0の力で魔力攻撃を跳ね返すことができるんだからな」

「あつ、そっか。じゃあどんなに攻撃が来ようと魔力攻撃に関しては絶対捌けるってことじゃん」

「まさにメリオダスちゃんにうってつけってやつですね！」

「そういうこと」

「でも結局アタシやシグナムみたいなタイプには初見殺し以外使えなさそうだよなー」

「それでもねえさ。使い方はいろいろある」

「例えば？」

「そーだな、組み手をすんなら二人同時までだったら相手できる」

メリオダスの言葉は暗に分身でも互角もしくは勝てると言っている。

そしてその言葉がヴィータの心に火をつけた。

「・・・へえー、じゃあ試してやるよ」

グラーフアイゼンを構え、鎧を展開するヴィータ。

その目には闘志が満ちていく。

騎士としてあのような言葉を聞き逃すわけにはいかないのだ。

「一応聞いとくけど、分身が攻撃くらっても本体には何も影響しないんだよな？」

「ああ、あくまで分身だからな」

「なら・・・心置きなく叩きつけられるな！」

「ああ、それで俺が勝ったな」

「そうだよ・・・あたしはカートリッジまで使ったのにさ……」

「まあまあ元氣出せよ」

「お前のせいだからな!? くそお、腹立つなあ。やっぱりアタシもやろうかな……?」

笑いかけるメリオダスに頬を膨らませるヴィータ。

実力を認めているものの悔しいものは悔しいのだ。

「でもほんとメリオダスちゃんの実力は底が知れないですよね」

「にししっ、その方が魅力的だろ？」

その言葉に全員自然と笑みがこぼれた。

これが彼らの日常。

「さっ、冷めないうちに食おうぜ」

「そうですね」

・・・

「「「まずい」「」」

「そんなく(泣)」

・・・ここまでが日常。



荷物を入れたバック内でその本は一瞬淡く光る。

白紙のページに文字を刻みながら……

とある町の一角。

そこに一軒の食事処があった。
しかしただの食事場ではない。

【可愛い従業員に癒されよう！本日オープン！】
扉の前にある看板にでかでかと言われた文字。

その脇にはメイド服を着た従業員の写真が所狭しと張られていた。
そう、所謂メイド喫茶だった。

「ここだな。あいつら撒くのに苦労したぜ」

そしてその扉の前に立つは我らがメリオダス。

彼の手にはこの店のパンフレットがしっかりと握られていた。

「開店時間前にはちと早いがあいつらに見つかりと面倒だし・・・入っ
ちまえっ」

カランカラン、と軽快な鈴の音と共に扉が開かれる。

「邪魔するぜ・・・って誰もいねえ？」

開店時間まであと一時間だというのに店内には人っ子一人いない。

これではメイドを見て眼福しながら待つメリオダスの計画は台無し
になってしまう。

「ん？誰か倒れてんな」

メリオダスが向かったのは奥のカウンター。

その隅から足が少し飛び出していた。

引っ張り出してみれば通信機を持ったまま泡を吹いている男が
出てきた。

「おいおい、こんな調子じゃ開店時間が遅れちゃうって」

楽しみに来たメリオダスとしてはそれは避けたい。

少し強めに男を揺すってみることにした。

「おーい、おきろー」

「・・・はっ!?い、い、い!?私は一体なにを・・・」

「ここは新しくオープンする店であんたはその隅で泡吹いて倒れて
た」

「店…？…そうだったー!？」

外にまで響きそうなほどの音量。

思わずメリオダスも真顔で両耳を塞ぐ。

「な、なんと言おう事だ…もうおしまいだ…」

「泡吹いて倒れてたり、起きた瞬間叫んだりしてどうしたんだ？」

「…というよりも君は一体…？…それは」

男の視線はメリオダスの手に向いていた。

その手には握りしめられたこの店のパンフレット。

「そうか…君はお客さんだったのか…」

「わarii、開店時間前に入っちゃってよ。それで開店まで中で待つていいか？準備ぐらいは手伝うからよ」

「…残念ながら開店するときはこなくなってしまったんだ…楽しみにしてくれていたようなのにすまない…」

申し訳なさそうに俯きながら男はメリオダスに謝る。

その顔には悔しさが満ちていた。

「どうしてだ？」

店内を見渡せば掃除が行き届いた椅子やテーブルに装飾品。

厨房からの料理のいい匂いはここまで届くほどだ。

あとは従業員さえくれば何も問題はなさそうだった。

「…従業員が風邪でこれなくなってしまったのさ…全員ね…」

「そいつは災難だな。それじゃ数日は開けねえな」

「いいや、今日オープンできなきゃもうこの店はお終いなさ…」

「そりやまたなんでだ？」

「こういう店を開くことは私の夢でね。料理の腕を見込まれて店を持たないかと言われたときは舞い上がったもんさ。しかし、僕の提案したこの店にスポンサー側は反対派だった。そんな意見を絶対にうまくいくと何とか押し切ってオープンまでこぎつけたんだ。だからオープン実績を見せつけなければこの店はすぐに他の店に変えられてしまうんだ。まあ、オープンすらできないなんて問題外だけだね…」

男の表情からはいつの間にか悔しさはなくなっていた。

代わりにあるものはあきらめだ。

「あーあ、やっぱり無理だったのかな…反対されてばっかだったし…」
「…俺はよ、最初にこいつを町で受け取った時驚いたぜ？世の中こ
んなすげーこと思いつく奴がいるのか、つてな。そんなすげー楽しみ
にしてた」

「…」

「だから、あんたは間違っつてねえ。少なくともここに一人はあんたの
夢が心をつかんだ男がいるんだからな」ニシシッ

嘘偽りない言葉に無邪気な笑顔。

そんな純粋な男を前に男は再び決意した。

「…ありがとう、救われたよ。…私はいつかまた自分の力で店
を開こうと思う。だからその時は君のことを招待させてくれ」

男の顔はとてすがすがしいものに変わっていた。

否定され続けてきた夢をたった一人にでも肯定してもらえた。

それだけのことだがそれはとても大きい。

だから男は夢を追い続けることができる。

「断る」

「えっ?」

えっ?そこで断るの?

男の顔にはまさにこのような言葉がかかっていた。

「なに諦めてんだよ?俺はこの店がいい」

「む、無理を言わないでくれ!」

「オープンさえできればあとは何とかなるんだろ?」

「そのオープンが無理だと先ほども言っただろう…?従業員の代わり
を今から見つけるなんて無理だ!」

「それでもねえさ。俺に考えがある」

メリオダスの表情は自信に満ちていた。

・
・
・
・

「というわけだ。頼むぜお前たち」

「いえ、我々まったく状況が呑み込めないのですが…?」

男——ハバラとの会話を終えメリオダスは店を飛び出し、宿まで戻ってきていた。

ヴォルケンリッターも探していた主が帰って来たと思っただけで開口一番にこれで困惑する。

「仕事さ、仕事。とにかく時間がねえからついてきてくれ。あつ、武器はいらねえから」

「ど、どういうことですか?」

「まあまあ、いいからいいから」

メリオダスに言われるがまま付いて行くヴォルケンリッター。

「戻ったぞ」

「メリオダス君本当に大丈夫なのか!? 君だけが頼りだからね!」

「まあ、見て見ろって。入ってきてくれ」

メリオダスの掛け声でヴォルケンリッターが続々と店内に入る。

「わあ! 可愛いお店ですね!」

「なんとも変わった食事処ですね…」

「ここが今日の仕事場か?」

「いやいや、腹ごしらえじゃないか? えへへ、あたしオムライスつのにしようかなー」

「か、完璧だー!?!」

「「「っー」」」

「だろ?」

「完璧だよメリオダス君! これならなんとかなりそうだ!」

「ならさっそく指示をくれ」

メリオダスの手を取り、ブンブンと振るハバラ。

「どうやら彼のイメージと一致したようだ。」

「あのー我々は一体何をするのですか?」

「まだ何も説明されてませんね」

「俺達の仕事はこの店の運営だ。因みにこっちが店長のハバラ」

「急なお話ですがよろしくお願いします」

「ええー！なんだ、ご飯じゃないのかー！」

「もちろん皆さんには後でご馳走しますのでご安心ください」

「えっ、マジ？やったー！」

「それで何をすれば？」

「とりあえず皆さんあちらの更衣室で店の制服に着替えて頂けるでしょうか」

そう言っただけでそれぞれに袋を渡していくハバラ。

そして各々、更衣室に入り十分ほど。

全員の着替えが終わる。

「じゃーん、どうですか？」

「た、丈が少し短くないか…?!?!」

「気にしすぎよ」

「おおお〜壮観！やっぱり俺の見立てに間違いはなかったみてえだな」

メイド姿のシヤマルとシグナム。

そのコンセプトは「見えそうで見えない」である。

「これは少々首元がきついですな」

「似合ってるぜーザフィーラ」

「恐縮です」

ザフィーラの服は執事服となっている。

役目としては従業員に手を出させないための客への牽制だ。

「・・・納得いかない・・・」

そしてヴィータはというと・・・

「どうしてアタシはエプロンなんだよー！」

いつもの服にエプロンをつけただけだった。

「落ち着け、俺もエプロンだ」

「そんなフォロワーいるか！アタシも可愛いのがいい！」

「・・・ごめんね。君たちに合うサイズの制服がないんだ」

「まっ、当たり前前だわな。それぐらい我慢しろ」

「・・・わかった・・・」

渋々納得をするヴィータ。

「では皆さんもうすぐ開店ですのでよろしくお願いします。接客の
二人には今から軽くこの店独自の接客についてお教えしますので」
「独自ですか？なんか難しそうですね？」

「大丈夫ですよ。逆にこれさえ守ってくれば他は多少つたなくても
構いません」

「それならば私たちでもできるかもしれない」

「気張らずいきましよう。いいですかまず——」

「お、おかえりなさいませご主人様！」

そして赤面。

シグナムの身体がプルプルと震える。

シグナムは恥ずかしくすぎて死にたい気分だった。

「よき…」

しかし、皮肉なことにその反応が客の心を掴んでいた。

一方、シャマルもまた客の心を掴んでいた。

「おかえりなさいませ〜ご主人様〜！こちらのお席どうぞ〜」

まるで熟練の従業員のような動きで客をさばっていく。

その仕事ぶりに眩しい笑顔がついているのだから視線を集めるの
は当然だった。

そしてその視線を感じ、目が合えば優しく微笑み手を振る。

「ふふっ」

「結婚したい・・・」

二人が客から女神のように見られるまでにそう時間はかからな
かった。

「どう？問題なさそう？」

調理の合間をぬってハバラが様子見に来る。

「今のところ問題はない。シャマルがドリンクをうまく作れない以外
はな…」

「えっ？結構簡単はずなんだけど…」

「ちようど持つて行ったから見ておくといい」

男性客のもとにシヤマルがコップを置く。

「お待たせしました、こちらメイド特製ドリンクになりまーす」

「こりや美味しそうだ。いただくよ・・・まずっ！」

「ええー!？」

男性客は思わず吹き出してしまう。

「た、大変だ!?すぐに止めないと!？」

「いや待て。それがだな…」

ザフィーラはハバラを止め、遠い目をする。

「いやしかし・・・メシマズもありだな！」

「そんな〜!？」

なぜだか男性客は喜んでいる。

というよりその反応を見て他の客も注文している。

これにはハバラも遠い目になってしまう。

「というわけだ」

「おーけー…問題はなしみたいだ…」

そういつて厨房に戻る。

そしてその厨房はというと。

「うおおお！すごい注文の数だ！厨房は私が守らねば！」

ハバラが死ぬ気で鍋を振るっていた。

「これなら俺にも出せるぜ！【特製ミートパイ】に【アップルっぽいパ

イ】だ」

「美味しそうだ！さすがメリオダス君だ！頼りになる」

「おーいザフィーラ！シヤマル達にも料理どんどん運ばせてくれー

！」

「うおおおお！」

「あつ（察し）」

ただ一人状況を察したヴィータはなにも見なかったことにして皿洗いを続けた。

「ふむ、なぜか俺も皿洗いになっちまった」

「いやまあ、前があんだけまじまじい騒いでんだからそうなるだろう」
「うおおお！うおおお！」

十数分後にはハバラ一人で鍋を振るっていた。

「皆さん今日はお疲れ様でしたー！本当にありがとうございます」
「っ、つかれた…」

「そう？楽しかったじゃない」

ガクンツ、と一番に崩れたのは珍しくもシグナムだった。

逆にいつも最初に崩れるシヤマルが一番元気だった。

「とりあえずこれで終わりだろ？はやくオムライス食いたい！」

「お前は食い意地が張っているな」

「別にいいだろ？皆だってお腹空いてるだろうし」

「確かにお腹減りましたね」

「では作ってきますから皆さんくつろいでいてください」

どんっ

ハバラが言い終えた瞬間、シグナムは座り込んで机に頭を突っ伏した。

そしてそこからピクリとも動かなくなる。

「シグナムでこれって前の仕事はそんなに大変なのか？そのわりにはシヤマルが元気だけどさ」

「相性だ。我らが将にはこの仕事は堪えるらしい」

「ええー、楽しいのには？シグナムも可愛かったわよ？」

「…うな…」

「あれ、メリオダスは？」

「さつきハバラさんと一緒に厨房入っていきましけど？」

「…っ…！」

その言葉に突っ伏していたシグナムさえ顔を上げる。

シヤマル以外の顔が青ざめていく。

「やばい！今すぐ止めろ！」

三人は急いで厨房に向かうが・・・

「お待たせしました」

「お待ちかねのオムライスだぞー」

時すでに遅し。

既に人数分の皿を持ったハバラとメリオダスが出てくるところだった。

「遅かったか…」

「いやいや、全然待つてねえだろ？」

「そういうことじゃない…」

「？へんな奴らだな」

「さき、皆さん席についてください」

テーブルには人数分のオムライスが並べられていく。

見た目はよだれが出そうなほど美味しそうな出来だ。

(シヤマルもメリオダスも見た目だけは美味しそうなもの作るんだよな…)

(せっかく作っていたいたものだ。食べなければ失礼だが…)

「どうした？食わねえの？」

「そうですよ。美味しいのに」

(シヤマルは味音痴だからあてにはならないんだよな…)

「い、いただきます！」

(ザフィーラ、行くのか!?)

(さすがザフィーラだ!)

「・・・うまい…うまいぞ?」

「えっ」

食べたザフィーラはもちろんの事、その反応に二人も思わず声を上げてしまう。

そして恐る恐る一口運ぶと・・・

「・・・うっまー!」

「・・・おいしい」

「気に入っていただけで何よりです。おかわりもありますから」

「いくらでも食べられるってこれ！でも、なんでだ？メリオダスも一緒に作ったのに・・・あっ」

「ふむふむふーむ、なるほどなあ。さつきからなんかおかしいと思ったらそういうことか・・・」

ビクツと肩が震える三人。

シャマルはよくわかっておらず頭の上にははてなマークが浮かんでいる。

「あはは！そんなこと心配してバカだなあ。俺が料理できる奴がいるのにするわけないだろ」キリツ

「かつこつけて言う事じゃない・・・って、じゃあなんで厨房に？」

「ああ、ちよつと許可をな・・・ほらよ」

いつの間にかメリオダスの足元には紙袋があり、その袋をヴィータに放り投げる。

突然のことでギリギリ受け止めるヴィータ。

「あぶないだろ！」

「まあまあ、中身見て見ろって」

「・・・服？」

「出してみろ」

言われるがまま紙袋から服を取り出す。

出てきたのはフリルが付いた可愛らしい服だった。

「それ着てれば前に出ていいってよ」

「えっ？」

「着たかったんだろ？お前にやる」

ポカンとしていたヴィータだが徐々にその顔がパーツと晴れやかになっていく。

「マジ？ほんとにほんと？」

「嘘ついてどうすんだよ」

「やった！ありがとう！」

服をもつてくるくると回り始めるヴィータ。

その光景は皆を自然と笑顔にした。

しかしその中で一人真顔なものがいた。

シグナムだ。

「あの一、主メモリオダス。この仕事は今日で終わりなのでは…？まだ終わっていないかのような口ぶりですが…」

「ん？最低あと二日はやるぞ？…この従業員の風邪が治るまでちよつとかかりそうだからな」

「それは責任重大ですね！今日より頑張りましたよシグナム」

「……」

「シグナム？……き、気絶してます…」

「で、では皆さんこの調子でよろしくお願いしますね」

こうして犠牲を出しながらもハバラは実績を出し、この店は存続していくことになる。

そしてこの数日間の売り上げは伝説となった。

とある街の宿。

そこでテーブルを囲って会議が行われていた。
やっっているのはもちろんメリオダス達だ。

「さて、そろそろ次の次元を目指す訳だが…」

「はーい、私は綺麗などころが多いところがいいと思います!」

「あたしは面白いとこ。なんかこうグワァーって感じの」

「温泉がある所が良いですね。この前初めて入りましたがあれは良い
ものです」

「主と共に行けるのならどこへでも」

議題は次の次元世界について。

思い思いの場所を上げていく面々だが…

「金がない」

両手を上げ、肩をすくめるメリオダス。

強かろうが金に関してはまきにお手上げだった。

「…メ、メリオダスちゃんたら冗談ばかりか。つい先日、食事処
で仕事をしたばかりじゃないですか。ねえ、シグナム?」

「わ、私に振る必要はないだろ!?!思い出すだけで恥ずかしい…大体
あそこの服はなんなんだ? あんなフリフリした服では動きにくいで
はないか…」 ブツブツ

「似合ってたわよ?」

「い、言わんでいい!」

「アタシは楽しかったけどな」

「ヴィータちゃんも可愛かったわねー」

「シャ、シャマルには敵わないって。一番馴染んでたし。シグナムも
そう思うよな?」

「そもそもああゆう服はシャマルに似合うのだから私が着る必要はな
かったのでは…?」 ブツブツ

「…ふむふむ、完全に自分の世界に入っちゃまってるな」フニフニ
シグナムの胸を揉みながらメリオダスが言う。

しかし、その頭にチョップが炸裂する。

「めっ、ですよ！メリオダスちゃん。お話は終わってないんですから」
「いやいや、終わっても良くないって!？」

「シヤマルはずれているからな。それにしてもあれは結構な稼ぎだったはず」

「それで、お金はどうしたんですか？まさか使っちゃったんですか!？」
「いや、残ってるんだけどよお……足りねえんだよな次元渡んのには」

次元を渡ると言う事は本来ならばそうそうあることではない。

一般的な生活を送っていれば渡ることなど一生に一度あるかないかだ。

その理由は単純で次元を超えるための船は金がかかるからだ。
使うものは金持ちや商人あたりしかいない。

メリオダスの金欠の原因の一つである。

「今までは何とかやって来たんだがさすがに五人分はちよつとな……」
「……次元を渡るのにお金がかかるんですか？」

「そりや、船に乗るからな」

目をぱちくりさせて驚くシヤマル。

ヴィータとザフィーラも首をかしげる。

因みにシグナムはまだ帰ってこない。

「とういかなんで船に乗るんだ？」

「お前はなし聞いてたのか？次元を渡るからって言ってんだろ」

「いや、だからなんで次元渡んのに船なんかに乗るんだよ？」

「……お前馬鹿か？」

「はあ!?馬鹿とはなんだ！お前の方が馬鹿じゃねーの？ばーか」

「これだからガキは」

はあー、とため息をついて呆れるメリオダス。

その態度にヴィータの怒りがさらに高まる。

「だいたいお前がわけわからないこと言うからだろ！」

「お前にはちと難しい話だったか？わりいな」

「っ！言ったな！」

「ストップ！ストップ！」

グラーフアイゼンを取り出し殴りかかろうとしたヴィータだったがギリギリのところまでシャマル達が仲裁に入った。

ヴィータの前にシャマル、メリオダスの前にはザファイラが立つ。

「落ち着いてヴィータちゃん」

「止めんなシャマル！こいつには一回ガツンと「怒りますよ？」で、でも「お・こ・り・ま・す・よ・？」・・・わ、わかったよ…」

普段のシャマルからは考えられないほどの威圧感に思わずアイゼンを引つ込めるヴィータ。

そのあまりの威圧感に「あいつだけは怒らせてはいけない」とその場にいる全員が思った。

「で、でもアタシが悪いわけじゃないよな!?!な、ザファイラ」

「まあ、確かに船に乗るといっはいいさかさ不思議ではある。我々で次元転移を行えば良いからな」

「はっ?」

「あつ、それ私も思ってたました」

「・・・次元転移出来るのか?」

「当たり前だろ。だからアタシはなんで船乗るんだって言うてるの!」

因みに次元転移は高度な魔法だが実は個人でできないという訳では無い。

単に使える者が珍しいだけなのだ。

「・・・ヴィータ、悪かった」

「な、なんだよ素直に謝って気持ち悪いな…」

「でも、そういうことはもつと早く言えよな。まさか使えるなんて思わねえんだから」

「なんだよ、メリオダスは使えないのか?」

「何度も覚えようとはしたんだがダメなんだよな。前にも言ったっけか?魔法は苦手みたいなんだよ」

「へえー、ふーん・・・」

その言葉にヴィータはニヤニヤしながらメリオダスを見る。

「そっかー、メリオダスは使えないのかー。あつ、じゃあもしかしくてもアタシって凄いのかなー?」

いつものお返しと言わんばかりにヴィータの反撃。

「ああ、ほんとにすげえって」

「っ!?!／／／」

はずだったのだが・・・

突然、メリオダスに頭を撫でられたことで動揺してしまう。

(お、落ち着け、そういう作戦なんだ…)

「で、できて当然だろ!」チラツ

チラリとメリオダスの表情を伺い、さらにヴィータは動揺する。

なぜならその表情が本当に嬉しそうな笑顔だったからだ。

「次元転移をできて当然とは、ほんと頼もしい限りだな」ニシシツ

(な、なんか負けた気分…)

ヴィータは嫌味で仕返ししてやろうと考えていた自分を酷く小さく思うと同時に、改めてメリオダスを見直していた。

「これで酒も飲み放題ってわけだ!」

「えっ…」

「いやー、今までは次元超えるために控えてただけだよ。それが必要ないってんだから最高の節約技だな!」

「・・・」

が、急速にヴィータの中でメリオダスの評価が落ちた。

それと同時に恥ずかしくなっていく。

こんなやつに一瞬でも尊敬しそうになったことを。

「メリオダスちゃん、ほんとにお酒が好きですよね?」

「そういうシャマルこそ結構好きだろ? たまに飲む時グビグビ飲んでるしよ」

「あはは…バレちゃってました?」

「馬鹿野郎…」

「ん、どうしたヴィータ?」

「メリオダスの馬鹿野郎!」

「うおっ!?!急にハンマー振り回してどうした。それにお前顔真っ赤

「じゃねえーか？」

「うるさいうるさいうるさいー！」

今日もにぎやかなメリオダス一行だった。



次元転移で新たな次元世界に移動してから一週間。

一行は温泉街に来ていた。

「おおー！ここが温泉街か！すっげえ、湯気だらけじゃん！」

「ほんとにいろいろな温泉があるのね。どれにはいるうかしら？」

「えー、地ビールにあつかん？飲んだことねえ酒もあんな」ニシシツ

「主、ほどほどにしてください。先日も酔いつぶれたではありませんか」

反応は三者三様だが皆浮かれた雰囲気か漂っている。

一人を除いて。

「・・・なあ、シグナムのやつどうしたんだ」ヒソヒソ

「そうね、ちよつと目が怖いわ」ヒソヒソ

そう、シグナムである。

この温泉街を一番楽しみにしていたであろうシグナムは鋭い目で街を見つめていた。

「あー…予想と違かったか？」

「えっ？突然どうしたのです？」

「いや、あんま楽しそうに見えねえから予想と違ってガツカリしてるんじゃないかと思ってよ」

「そ、そんな滅相もございませぬ!?むしろ見とれていたぐらいで——」
バサツ

「なにか落ちたわよ？」

あたふたとするシグナムの懐から一冊の本が落ちた。

シヤマルが拾って見るとかなりの付箋が貼ってある。

「これは、温泉旅行ガイド？」

——バツ！

凄まじい速度でシャマルの手元のガイドブックシグナムが取られた。

「こ、これはだな…守護騎士として事前に調べていただけだぞ…？決して、浮かれていたとかではないからな／＼／」

本を後ろに隠しながら口をとがらせるシグナムの顔は赤い。

((あの顔、ほんとに見とれてたのか…))

少し驚くがシグナムの珍しい一面に一同はほっこりする。

「主の安全を確保するのは守護騎士として当然のことです…な、なにをニヤついている！／＼／主まで…！／＼／」

「いやゝ悪い悪い。シグナムがあまりにも可愛いからよ」

「かつ、可愛い!?!私が!?!か、からかわないでください!／＼／」

「からかってなんてねえよ?なあ?」

「ええ、シグナムは可愛いもの」ギユツ

ギユーツとシャマルがシグナムに抱きつき、頭を撫でる。

「や、やめないか…恥ずかしい…!／＼／」

そうは言うもののシャマルを無理に引き剥がそうとはしない。

「あはは!シグナム顔が真っ赤だ、真っ赤」

「ヴィータまで…」チラツ

シグナムは残る最後の希望ザフィーラの方を見るが…

——諦める

そう言うかの如く首を横に振るだけだった。

こころなしかその顔は微笑んでいるように見える。

がくり、とシグナムは膝から崩れ落ちた。

「んじや、満場一致したとこで行くか」

「はい」「はあ、笑った笑った」「御意に」

「…」

「シグナム、行くぞー?」

「——です」ボソツ

「ん?なんだって?」

「不公平です！」

ガバツ、と顔を上げるシグナム。

「私ばかり振り回されているのは不公平です！」
先程隠したガイドブックを前に突き出す。

「ですから、今日は私のプランに皆付き合ってもらいます！」

シグナム今日一番の迫力であった。

思わず目をパチクリとする一行。

「別に構わねえけど、そんなことでいいのか？」

「そんなこと？主メリオダス、軽く見えますね？」

ズイツ、とメリオダスに前のめりで近づくシグナム。

謎の凄みにメリオダスも一歩後ずさった。

「主はここを侮っています。いいですか、そもそも——」

そこから始まったのはシグナムの温泉街に対する考えや温泉街の事細かな詳細、魅力についてだ。

かなりの饒舌でシグナムは喋り続けている。

そして、地雷を踏んでしまったメリオダスが逃げようとするが…

「どこへ行かれるおつもりですか？話はまだまだおわってませんよ？」

「あー、シグナムさん。これはやりすぎでは…？」

「いいえ、これも主のためです。さて、続きを話しましょう」

シユランゲフォルムで拘束され、話を聞かされ続けた。

そんな光景を遠巻きに見ている3人は苦笑いしつつも嬉しそうだった。

「まさか、あのシグナムが我儘を言うまでになるとはな」

「いい事だと思うけど、あれはちよつとね…」

「いいじゃん、シグナム楽しそうだしさっ！」

小さいけれど大切な変化。

それは彼女達にとってかけがえのないものだった。



温泉街を巡ること5時間、一行はようやく旅館のチェックインを済ませ部屋で休んでいた。

「だあ、疲れた〜！」

「主、お疲れ様です」

男部屋にてメリオダスは大の字に寝そべる。

「1日で隅から隅まで観て歩かなくてもよお…」

「ふつ、シグナムは少々せつかちですからね」

「それに話が長いんだよな〜」

今日一日、メリオダスはシグナムに名所の解説を逐一されていた。

それもシグナムとしてはメリオダスに少しでも楽しんでもらいたい一心からなのだが、疲労の原因でもあった。

「あー、ひとつ風呂いくかー。ここの温泉は疲労回復にいいらしいし」

「お供します」

着替えを持ち、二人は大浴場に足を運ぶ。

廊下の途中には休憩室に遊戯室と言った様々な部屋があり、宿の充実さを改めて体感出来るものだった。

「あら、メリオダスちゃん達もお風呂？」

「ん、お前達もか。奇遇だな」

男湯、女湯に別れる直前のスペースで一同は会した。

「シグナムが直ぐに入りに行こうってうるさいんだ」

「むっ、それは当然のことだろう。ここは温泉街でこの宿の温泉はだな——」

「はい、ストップ。続きは入りながら聞くから、ね？じゃあ、二人ともまた後でね」

「おう、楽しめよ」

「あまりはしやぎすぎんようにな」

お互い別れて暖簾をくぐろうかという瞬間、ヴィータが身体を翻した。

「あつ！風呂から出たら卓球だかな！絶対だかな！」

「わかったわかった……さつきと入れって」
今度こそ暖簾をくぐる。

服を脱ぎ、タオルを片手に浴場の扉を開け放つ。

「おっー！」

「広いですね」

入口から見ただけでも五つの温泉が見え、そのどれもがよく手入れが行き届いていることが伺えた。

「こりやシグナムが熱くなるわけだ」

「納得です」

「えーっと、まずは身体をあらうのがルールだっけか」

シグナムからマナーについては事前に叩き込まれていた。

「主、お背中をお流しします」

「おっ、サンキュー。……そうだ、礼といっちゃなんだが俺もザフィーラの背中を流してやるよ」

「れ、礼などと……俺がやりたいだけですの——」

「そういうなって。俺も俺がやりたいからやるんだから。ザフィーラはいつもよくやってくれてるしな」

「……では、お願いします……」

見事言いくるめられたザフィーラだったが、そのまま終わる男ではない。

配慮を忘れぬ素早い動きでメリオダスを座らせ、その後ろにしゃがみ込んだ。

先に奉仕する、その事だけは譲らない。

「俺からお背中をお流しさせていただきます」

「おっ、なんかやる気満々だな」ニシシッ

当のメリオダスはそんな心情梅雨知らず肩にかけていたタオルを端に置く。

「たのむぜ」

「はい。では、やらせていただ……主、この痣はどうしました？」
「痣？」

そう言われメリオダスは鏡で確認をする。

背中、正確には右肩甲骨を中心に直径七センチほどの黒い痣が出来ていた。

その痣はまるで中心から広がっているかのようだ。

「こんな痣いつの間に来たんだ？」

大きな痣だがいつ出来たのかメリオダス自身には分からない。

なぜなら鏡を見なければ自分では確認が出来ない箇所に来ている事や普段の水浴びは個人で済ませていたりなど、放浪しているメリオダスには気付きにくい理由があったからだ。

「これ程の痣、痛みなどはないのですか？」

「・・・ねえな」

数秒間、指で押したのちケロツと答える。

その表情にザフィーラも少しホツとした。

「大方シグナムとの模擬戦で出来たんだろうよ。夢中になってると気付かねえし。ま、大丈夫だから続き頼むわ」

「わかりましたが、主あまり心配をかけないでください」

「悪い悪い、今度から控えるし、こんな寝ときや治るって」ニシシツ

「はあ、なら良いのですが」

「——ああ、だから心配すんな」

その一言で痣についての会話は終わり、彼らは何事もな湯を漫喫した。



風呂から上がり、メリオダスとザフィーラはロビーで三人を待っていたのだが戻って来たのは顔が随分火照った二人だけだ。

「あれ、シグナムはどうした？」

「もう少し入ってるって言うので先に出てきちゃいました」

「はあ、あつつう〜。シグナムのやつ、よくあんなに入ってるよな」

「ヴィータちゃん、あんまり浴衣をパタパタしちやダメ。はしたないわよ?」

「ええー、だって暑いじゃん——あつ!二人だけでずるい!」

ヴィータが見ているのはメリオダス達の前にあるテーブルの上。

そこには空になったカップアイスが二つあった。

「別にずるくはないだろ。ほら、好きなの買ってこい」

呆れながらも小銭入れをヴィータに渡すメリオダス。

小銭入れを受け取るやいなやヴィータはさっきまでの気だるそうにしていたのが嘘のようにルンルン気分だ。

「……二個買っていい?」

「いいぞ」

「マジで!?!」

予想外の返答にパーツと表情を輝かせる。

「ただし、シヤマルとお前の分で二個な」

しかし、それも一瞬だった。

「ケチ!いいじゃんか」

「ダメだ。お前、アイスの一個ぐらいで騒ぐなんてガキだぞ?」

「メリオダスだってアイス一個ケチるなんて大人として心が狭いんじゃないか?」

「はいはい、そこまでにしましょうね。意地悪な言い方しちゃうのメリオダスちゃんの悪い癖ですよ」

「げっ」「ソーだソーだ」

「ヴィータちゃんもよ。二個も食べたからお夕飯たべられないでしょ?」

「うっ…た、食べれるもん」

「ほんとうに?もし食べきれなかったらシグナムに相談しちゃうけど、いいのね?」

「そ、それは…」

シヤマルの言葉にヴィータはバツの悪そうな顔になる。

ヴィータは仲間内で特にシグナムには子供っぽいと思われたくないのだ。

これも頼もしく思つて欲しいという子供ながらの考えではあるのだが。

「……が、我慢するよ」

「うん、我慢できてえらいえらい」

「頭ポンポンするなあ……」

「ごめんごめん。さ、アイス買いに行きましたよ?」

そんな会話をしながら二人は売店へ向かった。

「……シヤマルにはかないませんな」

「ほんとにな」

「主ももう少し素直におつしやればよろしいのでは?」

「ああ、そうだな……」

「主?」

「ん、どうかしたか?」

一瞬、ほんの一瞬だがザフィーラは違和感を覚えた。

何がと言われればザフィーラ自身も上手くは説明出来ないだろう。

「……いえ、なんでもありません。すみません」

「なんだよ、変な奴だなく」ニシシツ

(フツ、やはり気のせいかな)

それに加えメリオダスのいつも通りの笑顔、ザフィーラは先の違和感と思ひ違いだと結論づけた。



深夜二時、誰もが寝静まったこの時に一人起きている者がいた。

その者——メリオダスは屋根の上で酒を飲んでいた。

傍らには分厚い本が一冊。闇の書だった。

「さてさてさーて、どうしたもんかな」

闇の書を手にとるとページをパラパラとめくる。

本来白紙であるはずのページには文字の羅列が刻まれていた。

——否、刻まれ続けていた。

一文字、また一文字とゆつくりとだが確実に文字が刻まれていく。その文字からは微かにだがメリオダスと同じ魔力が漂う。

「俺を喰っても美味くねえだろうに」

眩いてみるが文字は変わらず刻まれていく。

その様子に頭をポリポリと掻き、倒れ込む。

「ちよつとやばいかもな……」

メリオダスがこの事に気がついたのは痣を指で押した時だった。

(何も感じねえ……)

痛みどころか押された感触すら感じなかった。

それに対し、一番最初に抱いた感想は「喰われた」だった。

次いで思い浮かんだのは闇の書。

「不思議なもんだ。認識してみればはつきり繋がってるのが分かっちゃう」

気づかなかったのが馬鹿みたいに繋がりを感じている。

それも命が吸われ続ける感覚を。

「だからってあれはないよな……」

ヴィータに対してトゲのある言い方をしてしまったことを後悔していた。

神経質になっていたとしてもメリオダス自身はそれが許せない。

「お前も関係あんだ。今夜は付き合えよ」

闇の書の前にグラスを置き、酒を注いでいく。

自分の分も注ぐとグラスをがち合わせる。

「乾杯」

当然返事など帰ってこない。

「無視か。まあ、それでも構わねえけど——」

メリオダスは自分の分を一気に飲み干す。

「プハ〜……お前に意思があることぐらいわかってんだぜ？なにせ俺達は繋がっちゃってんだからよ」ニシシッ

「……だからよ、お前も気にすんな。お前の意思じゃないことはわかってる」

繋がって感じるのは命の危機だけではなかった。

闇の書の意味から痛いほどに伝わってくるのは悲しみの感情。

メリオダスも何も酔狂で本に喋りかけてるわけではない。

「俺は大丈夫だ。——それにお前がずっとそんなんだと俺まで参っちまうぜ」

ニシシツ、と笑い新たに酒をつぐ。

結局、一人と一冊の酒盛りは朝まで続いた。



闇の底、一人涙を流す女がいた。

「ごめんなさい、もう止まらない……」

彼女の目には笑いかけてくるメリオダスが映っている。

彼女は泣きながら謝り続けた。

ごめんなさい、と——